資料配付（２）

平成27年度　東日本大震災心の復興事業

こころの復興フォーラム in みやぎ

～子どもたちの未来のために～

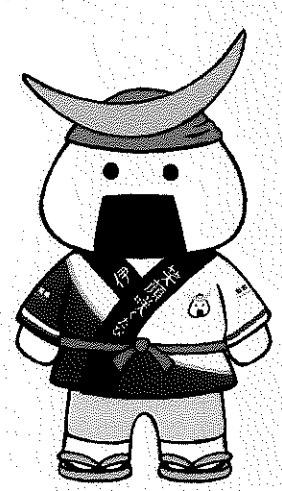
報告書

開催日　平成２７年８月１１日（火）
午後１時３０分から午後４時３０分

会　場　東京エレクトロンホール宮城

参加者　８０６名
（公立・私立 小・中・高・支援学校の管理職、関係課、地方機関、関係団体職員 他）

■基調講演
■パネルディスカッション
■アンケート
・集計結果
・参加者の意見・感想等
■資料
・当日の様子（写真）
・事業担当者名簿



むすび丸

【主催】宮城県教育委員会／仙台市教育委員会／宮城県市町村教育委員会協議会／
公立学校共済組合宮城支部
【後援】宮城県小学校長会／宮城県中学校長会／宮城県高等学校長協会／
仙台市小学校長会／仙台市中学校長会／宮城県私立中学高等学校連合会

基 調 講 演

演題　「大震災から５年目の子どもたち」

講師　宮城県保健福祉部次長兼子ども総合センター所長

本間　博彰　氏

皆さん，こんにちは。

只今，紹介していただきました本間と言います。２０１１年３月１１日の震災の後，宮城県子ども総合センターの中に「こころのケアチーム」が編成され，私はその指揮を取ってきました。今日で４年と５ヶ月。短くもあり，長くもありましたけれど（年月が）経ちました。おそらく多くの学校の先生方は息をつく間もなく，つくほどの時間もなく，それこそ背中を押される思いで時の経つのも忘れながら，子どものケアにあたられた，そういう姿を随分目撃してきました。また同時に，この度の大震災があまりにも巨大であったこと，この被災の規模は歴史的にもあまりにも大きく，そのことによる課題が大きすぎ，先の見通しが持てなくなり，閉塞感を感じ，そういう意味で，短くも長くもあったと思います。この時期は自分の心に照らし合わせても，とても複雑な心境に陥る時期です。例えば，結構疲労がたまっています。疲労と同時に，「この震災を忘れてしまいたい」「この震災を無かったことにしてしまいたい」，そのような気持ちが多くの方々の心の中にあると思います。それを今「風化」と言っています。風化しているわけではなくて，この震災が私たちにとって耐え切れないものであり，そのことの影響は大きいものだと思います。そしてまた，この先の見通しをどのようにつけていくのかなかなか答えを出せない。このような中で，私たちが複雑な気持ちに陥っているのがこの時期だと思います。この時期に少し今までの４年５ヶ月を振り返ってみて，私たちがやってきたこと・私たちがやれなかったこと，そして，震災によって子どもの心にいろいろな影響が及んでいますが，どんな影響が及んだのか，我々が分かったこと・分からないこと，それを少し総括的にまとめてみたいと思います。

今日は講演とは言いますが，皆さん方に私の報告をしたいと思います。そして，その報告をもとにこれから長丁場になるであろう「心の復興」に，みんなで力を合わせていければいいと思います。それでは，お手元に資料がございますので，その資料をご覧いただきながら，また画面を見ていただきなから，話をお聞きください。

この４年半の中で，私自身が時間が経つにつれて力を入れなくてはならないと感じたことは，学校とどのように連携して，どのような方法で子どもの心のケアに取り組むかということでした。なぜならば，就学前の幼児を含めて全ての子どもが学校生活をします。そして，その学校在籍期間の間に多くの子どもたちが心の問題を現します。アンケートで現したり，いろいろな問題行動で現したり，あるいは学業という中で心の問題が現れてきます。学校が心の問題の対応に大きく関わるのは目に見えています。否が応でも学校は巻き込まれます。しかし，同時にこの被災地において学校くらいしか子どもを守るところはないと感じました。学校は，子どものことに熱心な先生がたくさんいますし，先生方の目が子どもに注がれています。子どもは行事をしたり，勉強をしたり，いろんな活動をしていますが，その学校生活そのものが心のケアに大きく貢献しています。その意味で学校に期待するところが大変多いと考えていました。子ども総合センターは学校といろいろな関わりをしてきま

したので，その活動を紹介しようと思います。

まず，子ども総合センターに「心のケア推進班」を昨年設けました。この中に教員が２名，養護教諭が１名配属されています。また，「企画育成班」という研修を担当する部署にも教員が２名配属されています。子ども総合センターは教育，そして学校と大変近い関係の中でこの４年５ヶ月を歩んできました。２番目に学校と児童福祉の連携による支援活動をしてきました。この大震災は，我々専門家ですら全く経験のないことでした。ですから，どのように取り組んでいけば良いか分からなかった。そしてまた，学校と関わって，学校が年月の中でどのように変化していくのか，子どもがどのように変わっていくのか，どのような支援が有効なのか，そういった点を探り，明らかにする必要がありました。そのために学校の定期訪問をしました。これを「学校定点観測」と表現し，この「学校定点観測」によるプロジェクトを３年位前から行いました。このことについても後で報告します。それから，３番目に研修による支援活動をしました。例えば，教育事務所と協同した研修会を開催してきました。また，希望がある学校に対しては，学校ごとの希望に対応した学校の中での研修会を行いました。そのような活動を行いながらこの４年５ヶ月が経過しました。

学校とどのように連携が進んできたかということですが，学校と連携するにはいろいろな工夫が必要でした。初期の頃は校長先生からその学校のその時々の様子を報告してもらい，震災の影響が明らかなケースの対応を行いました。学校と連携が増えていく中で，校長先生が養護教諭とか担任教諭に声掛けを行い，複数の先生方とケースについての検討をするようになりました。先生方の中には「震災と関係ないと思うけれど，こういう問題が発生して，こういう事例があって，困っている」ことを，少しずつ少しずつ相談に挙げてくるようになった方もいました。「震災と心のケア」では「震災と関係のないものについては相談できないんじゃないか」という思いを持っている先生も多くおり，何度も何度も学校訪問をしていく中で，先生方は「震災とは関係ないとは思うが」という枕詞をつけて，いろいろな子どもの相談を我々に出してくれるようになりました。そのことによって，震災が子どもにどのような影響を及ぼしたかがだいぶわかってきました。

震災後期になると，発達障害を疑われる子どものケースが学校から相談されています。発達障害の子どもたちの心の問題がありますが，発達障害ではないが発達障害のように見えてしまう子どもの問題も随分相談されています。これは，特に被災した各沿岸部の学校に顕著で，教室運営のために多くの支援員を必要とする学校や就学指導委員会にかけられる子どもの数も増えてきています。年度が進むにつれて，時間が進むにつれて，様々な相談が増えて，これまで見落とされていた子どもの問題が取り上げられるようになりました。「定点観測」で学校を月に何度か訪問しますが，訪問する度に問題が挙がってきます。大事なことは，子どもの問題が多い学校がありますが，問題が多いからといって学校運営が悪いわけではないのです。僕らのような精神科の医者から考えると，問題がたくさん拾い上げられる・問題に気づくことのできる学校だから，たくさんのケースが挙がってくると考えられるわけです。問題が全然ないというのは，もしかしたら見落とされているか，先生方の目が曇っている場合もあります。ですから，問題が多いということが，決して学校の運営とは関わらないと感じています。

子どもたちの様子を見ていて，震災後期の子どもたちはどのような状態なのかということを整理したいと思います。例えば，（図を示しながら）これは子どもの成長…後から触れますが「レジリエンシー」と言って，子ども自身の持っている逆境や困難に打ち勝てるような素質のことで，そういう素質を持っている子どもたちが見つかってきます。例えば「災禍の中で何事もなかったかのように生きる子ども」が数多くいます。あれだけの震災があったからといって全ての子どもたちが心の問題を持つわけではありまあせん。影響はあるけれど，心の問題には至らない子どもが数多くいるわけです。６割から７割位の子どもたちは，心の問題を被ることなく元気になっていくだろうと思います。何故このような子どもたちは大変な中を生きていけるのか，上手くやっていけるのか，そのようなことに我々は目を向けざるを得ません。子どもはいろいろな資質を持っていて，いろいろな力を持っています。その力をどうやって引き出すかということが，我々の大きな課題だと思っています。

震災の後，めざましく成長発達する子どもたちがいます。「共感性」とか「愛他性」，「困っている人を助けたい」という気持ち，「手助けしたい」という行動が子どもたちの中に多くありました。それを「愛他性」と言います。他者を愛する。その逆が利己主義で自分のことばかりを求めることです。人のことを何とか助けたい，困っている人に手を貸そうという子どもたちが数多くいました。避難所で食べ物を配給したり，いろいろなことをしたりする子どもたちがいました。実は，子どもたちの中には人を助けたい「愛他性」が皆にあるのですが，その能力が何歳頃から人間の心の中に出来てくるのかと言いますと１歳数ヶ月だそうです。１歳数ヶ月の年齢で，困っているお父さん・困っているお母さんを手助けしたいという心が発動してくるのです。実を言うと，今の時代の子どもたちは，ルールを守る子どもとか，みんなが共通にしていることを大事にする子どもたちが困っている時には「手助けをしよう」という本能が働き，自分勝手であるとか，ルールを守らないとか，規範意識がない子どもが困っている時には，手を貸さない，助けないということが起こり得ます。この点もこれからの学校の中の大きなテーマだと思います。

それから，支援を受けやすい子どもや自分が必要とするテーマを分かっている子どもがいます。心の問題では，自分がどのような問題を抱えているかや自分が誰かに助けてもらいたいということをわかっている人が，立ち直りがものすごく早いのです。その反面，次のような子どもたちが我々のケアの対象になっています。例えば，心の問題が，本当はトラウマみたいなもので多くは環境さえよければ１年もすれば解消されていくのですが，１年経っても２年経っても心の問題が解消しない子どもたちや心の問題が遷延化する子どもたちがいます。また，今暴力事件がかなり起きているのですが，それは心の問題が実は悪化している可能性のある子どもたちです。不登校の問題，発達障害に類似した問題，暴力行為という問題など，見えにくい問題が進行，あるいは悪化している子どもたちがいます。見えにくい問題，なかなか我々が気づけない問題，他には無気力な子どもも結構います。やる気がなかったり，引きこもっている子どもや自分の将来に対して閉塞感や悲観的な思いを持つ子どもがいます。そして環境の悪化です。例えば家庭環境が悪化するとネグレクトとか虐待が発生します。それが今被災地の子どもの周りに，家族の中に，心の問題として起こっています。虐待に晒されている子どもたちがかなりの数に上ります。そのような中で，私たちは学校を訪問していました。

後期の時期における学校の相談には一つの傾向があります。学校を訪問していて，相談の中心の一つは発達障害を疑われる子どもの増加です。落ち着かない子ども，あるいは多動な子ども，他の子どもとはコミュニケーションが上手くいかない子ども。そのような子どもは発達障害を疑われるのですが，そのような子どもたちが増えています。これは確実に増えています。実際に発達障害の子どももいますし，発達障害ではないけれど発達障害を疑われる子どももいます。さらに，全体的な発達が心配される子どもが目立っています。先生方の話を聞くと，「子どもたちの発達が変だ」と話す先生がたくさんいます。また，粗暴，乱暴な子ども，中には自傷行為をする子どももいます。リストカットをする子どもや抜毛という自分の頭の毛を抜く子どもも結構目立ちます。そして相談の中には不登校の子どもたちも随分挙げられ，このようなところが相談の中心になっています。

それから，見落とされがちな問題もあります。（家庭や地域など）学校の外でいろいろな問題が発生し，学校では問題が発生していない。学校では落ち着いて，比較的，学校生活を上手く送っている子どもがいますが，その子どもの中には家に帰ると落ち着かないという子どもが結構います。前にもお話ししましたが，子どもは学校に行くと先生方の配慮があるから，学校の中でいろいろな活動ができます。勉強も含めていろいろ身体的な活動ができます。その中では，子どもたちは比較的メンタルヘルスが良い状態を保てます。ところが，学校を一歩離れて家に帰ると，その時の家庭環境とか，あるいは夜，子どもが寝

ている時などは一人になり，一人になった時に，子どもの心の中にいろいろ溜まっていた問題が出てきます。子どもの中には，睡眠障害の子どもが結構います。眠れない子ども，途中で目が覚めてしまう子ども，あるいは怖い夢を見る子どもがいます。私が診ていた子どもの中に，「夢の中に黒い服を着た怖い男の人が何度も何度も現れてくる」と言っていた子どもがいました。その子は実は３月１１日に津波を経験して，どす黒い津波が自分たちを巻き込もうと自分たちの方に向かってきて津波に追いかけられるわけです。黒いものに追いかけられる。黒い，怖い男の人が夢の中に出てくる。つまり自分の体験が夢の中に出てくるということです。そのような子どももいますので，学校の先生方にお願いしたいのは，学校の外にも目を向けなくてはならないということです。

また，子どもたちの課題の中の一つとして我々が遭遇する問題の中には，震災の影響かどうか区別のつかない問題が混じってきます。被災地では新しく赴任される先生もいますし，内陸部から被災地沿岸部に異動する先生もいます。そういう中で，子どもがいろいろ問題を出した時に，少し頭の中に「この子の３月１１日はどんな３月１１日であったのか」に注意を向けてもらえると震災の影響があったのかどうかがわかります。

ともかく，震災の急性期と震災の後期，慢性期では問題が異なってくるということです。震災の後期，慢性期では，心の問題の中に回避という症状，怖いから避けてしまうという症状が出ます。例えば，子どもの生活には，日々３月１１日に関連する出来事がいっぱいあり，子どもによっては３月１１日のことをいつも思い出すことになります。被災地を走る工事車両，あるいは工事車両によって発生する揺れ，大雨などの天変地異などいろいろなものがあり，子どもたちが３月１１日を思い出してしまう。であれば３月１１日のことを思い出さないような生活を選んでしまう。つまり外に出ない，学校に行かない，引きこもってしまうということが起こる可能性が高いのです。そして，中には心が麻痺してしまうとか，本来の感受性が出てこず，いろんな事に対して逃げ腰になったり及び腰になったり，感受性が鈍くなってしまうということも起こります。このようなことも，実は後期の問題として出てきています。

先ほどお話ししたように，隠れていた問題，震災の前に蓋をしていた問題があります。例えば，震災前というのは仮設住宅と違い，家族の生活ももう少し広い家でゆったりと生活できました。生活環境が良いと多少の問題も隠すことができます。隠れた問題の中には障害程度の軽い発達障害の子もいます。明らかな発達障害だと見える子どもと何となく発達に問題がありそうだなと思う子どももいますが，「何となく発達に問題がありそうだな」という子どもたちが，後期のこの時期のストレスの中で問題化してしまうことがあります。また，家族の受けたダメージが子どもの問題に上乗せされ，お父さんやお母さんが震災の後に抑うつ的であったり，絶望したり，あるいは夫婦喧嘩が多くなったり，離婚した家族もいますが，そのような家族の所の子どもは，親の問題も上乗せされてしまいます。震災はこれからも間違いなく，親の養育機能の低下をもたらしますので，そのことによって発生してくる問題として，虐待やネグレクトという問題はあまり減らないだろう，続くだろうと思います。そのような子どもたちを学校の先生たちが見ていくことになると思います。

次に，「災害弱者」の問題があります。災害は，特に災害弱者と呼ばれる方々に対して大きなダメージを与えます。高齢者もその災害弱者です。子どもも年齢が小さければ小さいほど災害弱者です。また，発達に問題がある子どもたちも災害弱者です。災害時に乳幼児だった子ども，１歳とか２歳，３歳の子どもたちは，災害の時の怖さを言葉によって表現できません。心の問題というは，言葉で語れば語るほど心の中から出てくることが多いので，今の時期になって「あの時怖かった」「あの時のことが思い出された」という子どもたちは，もしかしたら回復途中にあるのかもしれません。３月１１日に，いろんな行事がありますが，その時にいろいろな子どもたちが様々な問題を出すかもしれません。その時に，子どもたちがお互いに，「自分は，こんな怖い目にあった」「こんな体験をした」ことを子どもたち同士で重ね合うことができると，そのこと自体が子どもの回復の大きな力になると思います。

さて，「トラウマ」の記憶のことに少し触れておきたいと思います。心の外傷は，言葉による・言語による記憶と，身体の記憶・行為や態度で記憶されるものがあります。子どもたちが適切な言語能力を持

っていると，その適切な言語能力はトラウマの処理に大きな力を託します。そういう時には，かなりスピードがアップして早く回復していきます。ところが，言語能力を十分に持っていない子どもたちは言葉で表現できませんから，その言葉で表現できない記憶体験とか不安感が体に残ってしまうのです。頭が痛いとか，腰が痛いとか，身体の症状として残っている人もいます。言葉でうまく表現できない場合は，体の中に残っていて身体の症状として出てくるわけです。今でも保健室を利用する子どもたちが結構いると思います。これは身体で，あの３月１１日の苦しさを保健室の先生とか担任の先生にお話しをしているわけです。自分がどんな体験をしたのか，自分の言葉によってうまくまとめることは出来ませんが身体が物語っているということです。それから，子どもの中には突然に乱暴な行動をするとか，突然に理解できない行動をするということがあります。これは，トラウマが出現したときの姿であることが結構あります。したがって，今被災地の子どもたちの中でいろいろな問題行動や暴力行為をする子どもたちがいますが，彼らは気がつかないけれど彼らが心の中にしまいこんでしまってうまく表現できない心の傷が，暴力行為や乱暴な行為として出てきている可能性があります。

そして，転居・転校した子どもの問題も大きいものがあります。宮城県でも，震災後１年ぐらいした後，４千何百人の子どもたちが地域内・地域外へ転校しています。福島県に至っては９万人と言われています。その子どもたちは，かなりいろいろな問題を抱えていることが多い傾向にあります。子どもが新しい学校に適応するためにはエネルギーが必要です。転校することでいろいろな心配事が多くなれば多くなるほどエネルギーが抜けてしまい，子どもたちは，自分でエネルギ―をどうやって蓄えながら新しい環境に慣れていくかということを考えなければいけません。この転居・転校の問題は被災地の中にも起こっていますし，被災地でない所でも起こっています。仙台市でも，あるいは名取市でも古川でも，多くの学校が転校生を受け入れています。その転校生が，かなり重い負担と課題を抱えながら学校生活を送っています。その点をどのように私たちは処理をしていくのか。また同時に，これから先もリスクを抱える子どもたちに，私たちはもっと注意しなければならないと思うのです。

定点観測で多くの学校を訪問すると，先生たちは様々な取組をしています。例えば今年度４月に入学する子どもたちの，「この子は家が流れている」，「家が損傷を受けている」，「家族に犠牲者がいる」というものを全部リストアップして，新一年生に対して気を配っていこうという仕組みをつくっている学校もあります。「この子は心配だ」「リスクを抱えている」ことを先生方が共有できると自然にその子どもに目が向きます。その子どもに対して配慮するようになります。「自分のことを配慮してくれる」，「自分のことに関心を持ってくれている」先生がいることが子どもにとって励みにもなりますし，うれしいことにもなりますし，先生への親しさも感じます。このような様々な形で，子どもに対する配慮をしていくことで比較的いろいろな問題を乗り越えることができます。

さて，このスライドは，阪神淡路大震災の時の心のケアを要する子どもの数を表しています。阪神淡路大震災の時には１年目，２年目，３年目，４年目は，ずっと高い数値を示し５年目から下がってきています。東日本大震災では，神戸と比較してインフラや地域の復興が数年は遅れています。神戸は大都市でしたし津波はなかったため，インフラの修復は進みました。東日本大震災はそうではないのですごく遅れています。我々にとって，この復興の遅れが心の問題を長引かせる，あるいは心の問題を重くする可能性が高いということです。ですから，心のケアを必要とする子どもたちの数は，神戸では５年目から下がっていますが，東日本大震災では，２～３年，３～４年ずれ込むだろうということを想定しておかなくてはいけません。

これからのことをもう少しお話ししましょう。もしも，子どもたちが心の問題をケアされないとどうなるのか。見過ごされているとか，うまく表現できないとか，気づいてもらえない心の問題はどうなるか。これは（スライド），アメリカのＡＣＥ研究というものですが，その中にアドバンス・チャイルド・フューチャー・エクスペアレンス，「子ども時代の悲惨な体験」というものがあります。親が病気であるとか，親がアルコール中毒であったとか，親から虐待を受けたとか，そういう子ども時代からたくさんの悲惨な体験をしている子どもたちは，悲惨な体験が多ければ多いほどいろいろな問題を起こすことに

なります。例えば，思春期になると引きこもりという行動が出るかもしれない。青年期になると薬物中毒に向かうかもしれない。もう少し大きくなるといろいろ病気，例えば生活習慣病もありますし，重度障害を起こすかもしれない。もっとひどいのは自殺です。今，日本の自殺者は２万７０００人位ですか，大きな社会問題となっています。このようにケアされない心の問題は悪化をしていきます。やはり，これからの東日本大震災で心のダメージを受けた子どもに対して，もっと注意をしていかなければならないし，そういう子どもたちを見つけていく作業が欠かせないと思います。

さらに，学校から見えない所で起きている問題もあります。宮城県のあるデータですが（スライド），被災地の宮城県の状況，家庭機能の低下，ＤＶの数値を表しています。家庭内暴力，配偶者間暴力は，２０１０年は１３４８件，２０１４年は２２５４件とかなり増えています。学校の先生からは，あまりこのような問題は見えませんので，学校の外の方にも目を向けてもらいたいと思います。

次に大事な資料ですが，１９８０～２０１３年までの３０年間の世界の自然災害の件数を表したものです。ポイントは自然災害数がこの３０年の間うなぎ上りだということです。自然災害も増えていますが，自然災害のみならず，多くの災害に近いことが学校に起きています。災害というのは，外から加わった力に対してその組織やその地域が対応できない状態を言います。対応が出来たら災害ではありません。地震があろうが，津波があろうが，みんながうまく生き延びるとかその問題をうまく防ぐことができればそれは災害とはなりません。私の見解ですが，学校ではいじめの問題がすごく大きい問題だと思います。岩手県の矢巾のようにあれだけの事件が発生すると先生方のダメージ，生徒のダメージは大きいものになります。いじめも見方をかえると「災害」という側面もあると思います。つまり，災害で我々が得た知識はいじめ問題の時にももしかしたらもっとうまく使えるのかもしれません。名古屋大学の女子学生のタリウム事件がありました。あの事件もある意味では，災害という切り口で解決に向けることが出来ます。その他にも今，震災後のいくつかの学校で発生している激しい校内暴力も，実は校内暴力でありながら，そこに生活している人たちにしてみれば災害に近い側面があるかもしれません。ですから，災害で得た知識はいろいろ所で使えると私は思います。

レジリエンスの問題については，後でお話ししたいと思います。予定された時間も迫ってきましたのでまとめに代えて，次のようなことをお伝えしたいと思います。

災害とは，その時代の社会とか地域の抱えていた弱点や見過ごしてきた課題を，時代を先取りした形で顕在化させてあぶり出します。今被災地では子どもに対して不登校の問題や発達障害の問題が大きく出ています。これは，もしかしたら震災前に十分な対応が出来ていなかったり，出来てこなかった問題があったのかもしれません。だから，もう少し真剣にもっとうまく不登校の問題や発達障害の問題に取り組む工夫をし，そういう知識や取組方を身につけなければなりません。もう一つ，災害後には，大人が自分の気づかない所で自分の心の中に蓋をします。学校の先生方も自分は気づかないけれど，蓋をし疲労が蓄積しています。もし先生方が心のケアをしなかったら，自分自身の思考や悲しみとか嘆きという自分の感受性が麻痺のような状態になり，感受性が鈍くなり気がつかなくなってしまいます。そうなると考えがまとまらない，子どもの問題に気づけない，さらには自分自身の心の傷を深めることにもなります。したがって，先生方が，自分がケアできる大人の姿を見せること，子ども自身が自分のケアするそのモデルになると言うこと大切です。子どもの前に立つ先生が，自分が良い状態になるように自分のケアをきちんとすること，自分が困った時にはヘルプをもらうこと，先生を見ている子どもたちのモデルになること。これからは，そういう時代に入ってくると思います。先生方が，もっともっと健康でいられるように，もっともっと自分が必要な時にヘルプを出すようになると，その周りの子どもたちが先生のように自分もヘルプを出すことが出来るし，自分のケアをすることを学ぶことにもなると思います。

時間もきましたので私の話を終わらせていただきます。どうも，ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション

テーマ「子どもたちの未来のために」

～こころの復興をめざして　学校の現状から　～

●コーディネーター

東北大学大学院教授（担当分野　臨床心理学）　　加藤　道代　氏

東北大学大学院教育研究科震災子ども支援室（S-チル）室長

震災で親を亡くされた子どもたちやその保護者の支援を行っている。

●パネリスト

保健福祉部次長兼子ども総合センター所長　　本間　博彰　氏

児童精神科医・医学博士

震災直後から被災地を中心に子どもたちの心のケアに関わり、現在はセンター内の心のケア推進班を率いて小中学校と連携協同して子どものメンタルヘルス対策に取り組む精神科医療のスペシャリスト。

宮城教育大学教授　　田端　健人　氏

宮城教育大学教育復興支援センター運営委員

専門は教育学、哲学、教育現場のフィールドワーク。

宮城県臨床心理士会スクールカウンセラー担当理事　　髙橋　総子　氏

義務教育課が主催するスクールカウンセラー研修会講師

長年スクールカウンセラーとして子どもの心のケアを行っている。

気仙沼市立条南中学校長　　佐藤　正幸　氏

平成 25 年から平成 26 年度まで南三陸町立志津川中学校校長

被災地において子どもの心のケアを実践している。

加藤　皆様こんにちは。コーディネーターを努めさせていただきます加藤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

最初に本日のパネルディスカッションの進め方についてお伝えいたします。今日は４名のパネリストにおいでいただいておりますので，４名の先生方に順次続けてご発表をいただきます。フロアからのご意見・ご質問は４名のご発表の終了後，最後の討論の時間に頂きたいと思っております。どうぞご活発なご意見を頂戴いたしますようよろしくお願いいたします。

それでは早速始めてまいります。まず先ほど基調講演をいただきました本間博彰先生です。精神科医としての立場から震災後の学校についての心のケアについて，さらに補足も含めてお話いただきたいと思います。

本間先生よろしくお願いいたします。

長く続く震災後期の子どものケアと学校課題
～定点観測として取り組んだ学校定期
巡回相談の経験から学校の課題を検討～

本間　基調講演が終わりましたので，ほっとしたところですが，１２分間ほどお付き合いください。

私はこのパネルディスカッションでは，学校の課題ということについて，この４年半の間で知り得たこと，感じたことについてお話したいと思います。

私は，ずっと学校を訪問していて，学校はいろいろな可能性を持っていると思いました。その中で，特に驚いたのは，震災の後，数ヶ月，４，５ヶ月かな，子どもたちはすごく静かだったんです。問題もあまりなくて。それから夏休み明け頃から子どもたちはいろいろ不安定になってきました。しかしながらそういう中でも，今回の東日本大震災がこれほど大規模な震災にも関わらず，他の国の震災の後の子どものPTSDとか，問題と比べると遥かに少なかったんですね。アメリカでは，３０～４０％の子どもたちが問題となっていました。日本の子どもたちはそこまでいかなかった。ではなぜいかなかったのか。それは先生方が３月１１日の時に必死になって子どもたちを守ったんです。その後も先生方は子どもたちのケアをずっとしてきました。あの姿を子どもたちはずっと見ていたんです。そして，子どもたちはその先生方の姿を見て，安心感というものを得たはずなんです。そのことで子どもたちの心の問題がこれほど少なくて済んだのだろうと思っていました。

私は，気仙沼のある保育所の子どもたちをずっと何年かフォローアップをしています。その保育所は，津波火災があったりとか，被害が凄まじいところの子どもたちでした。その子どもたちはきっと大きな問題を持っているだろうということで，フォローアップをしてきました。そして，その子どもたちが入学した５校の小学校の先生方にいろいろ協力をしてフォローアップをしていきました。その子どもたちが３年半経った時点の PTSD はものすごく少ないんですね。なぜ少ないかと思ったのですが，それは，毎月その学校に行きますので，先生方もかなりその保育所の子どもに対しては注目をしてくれました。私に，随時「この子どもは今こんな問題がある」，「あんな問題がある」ということで報告をしてくれました。つまり，先生方の目が子どもに注がれていたんです。先生方の目が子どもに注がれるということが，たぶん子どもの心を支える大きなことだったと思います。そのような体験をして，私自身としては学校に対する思いを随分変えました。

そして学校を見ていきますと，やはり学校にいる時の子どもたちというのは元気なんです。明るいんです。そして問題はあまり出しません。それは，先生方との関係です。先生方はどこの学校の先生方も必死になって子どもを守りましたし，子どものことにすごい配慮をしてきました。そのことで子どもたちが問題が出ないで済んだ，少なくて済んだ。しかし，家に帰ると子どもたちのいろいろな問題が出てしまう。今，被災地の子どもたちにとって，ご家族が安定するとか，立ち直るというのはなかなか望めませ

ん。そうすると学校にいる８時間が勝負所だろうと思ったんです。学校こそが被災地の中で子どもたちを救うよい場所であり，先生方の視線そのものが子どもたちを救うんだろうと思いました。

その中で，学校を見てみますと，子どもたちは行事があったり，いろいろな課題があると，それを目標にしてがんばります。学校というところは子どもたちにとって楽しみがいっぱいあります。行事もそう，勉強もそう，いろいろなものが楽しみの中の一つになります。それをどのように組み込んでいくかというところが子どもたちにとってすごく大事なことだと思いました。

学校生活というのは，極めて当たり前な生活をするわけです。友達同士が切磋琢磨したり，時には傷つけ合ったり，時には支え合ったりします。いろいろなルールもあります。そして，学校に行くということは子どもたちが日常生活の基本的なことを学ぶわけです。その日常生活の基本を学ぶことが，先ほど言いましたレジリエンシーの一番大事なところなんです。日常生活をきちんとやれた子どもたちは精神的にどんどんどんどん成長していきます。そういうことを考えていくと，残念ながら不登校の子どもたちはそういう機会を逃してしまう。しかし不登校じゃない子どもたちにとっては，日常生活をきちんと送れるような，そういう配慮ができるということがとても大事なことです。そこには気にかけてくれる先生がいますし，これから先も，どんどんどんどん乗り越えていくんだろうと思います。

そして，もう一つ大事なこととして，子どもたちが先のことに関心が向く。先のことを予測できるということは人間の心の成長にとって大事なことです。今，防災教育とかいろいろな取組がなされています。三陸沿岸部の子どもたちは，大きな地震がくれば津波がくるというのは頭の中に叩き込まれています。つまり，それは予測がつくということなんです。大きな地震がくれば，津波がくるんだ，津波がくるから逃げよう，自分を守ろうという予測ができます。そういう予測性がつくということが心の健康にとってものすごく大事なことなんです。ですから，震災の後，防災教育とかいろいろなことをしていますが，それは子どもたちが自分の頭の中に予測性というもの，予測がつくという能力を身に付けているということだと思っています。それが大事なことだと思いました。

それから，もう一つ言いたいことがあります。先生方の疲弊ということがすごく心配になります。急性期には，先生方や支援者のメンタルヘルスという研修が結構ありました。急性期の頃のメンタルヘルスのテーマと慢性期，後期のメンタルヘルスのテーマとは少しずつ変わってきます。むしろ，慢性期の今の時期，後期の今の時期こそもう一度きちんとした先生方のメンタルヘルスのための，支援者のための心のケアというか，自分のメンタルヘルスを高めるようなことを，ぜひ学校で行ってほしいと思います。そのリーダーになるのが校長先生ですので，ぜひとも校長先生たちには他の先生方のメンタルヘルスを高めるにはどうしたらいいかということに取り組んでいただきたいと思います。そして，長期化するということが我々にとって大きな課題ですので，その長期化をどういうふうに乗り切るのかということでは，髙橋教育長さんが言われたように，子どものメンタルヘルスも大事ですが，先生方のメンタルヘルスもすごく大事ですので，その両方が両輪となって教育現場でより健康な活動ができたらいいと思います。ぜひとも先生方ご自身が，自分のメンタルヘルスのことを大事にしてほしいと思っています。また，どうやってそのバランスをとるかという点も大事になります。それが私が補足したいことです。以上です。

加藤　本間先生ありがとうございました。それでは次に，田端健人先生。先生には，教育に関する研究と実践の視点からご報告いただきます。

被災した子どもと教師のケア

田端　宮城教育大学の田端健人と申します。座ったままで失礼いたします。私は東日本大震災の学校現場の学校被害，教育復興について聞き取り調査を進めてまいりました。ここにご参加くださっている校長先生，教頭先生，それから教育委員会の先生方の中にもお話を伺わせていただいた方がおられます。この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。発表としましては，お手元の資料をベースに少し補足しながら１２分ほどお話させていただきます。

これまでの聞き取り調査，記録の読み取りからわかったことは，大変当たり前のことかもしれませんが，東日本大震災で子どもや教師が経験した恐怖，悲痛というものは想像をはるかに超えているということです。私が知るだけでも例えば，当日津波にさらわれて，翌日隣町で発見された小学６年生の女子児童がいます。その恐怖はどれほどのものだったでしょうか。ほとんど，想像を絶しています。また，当時教員だった父親を避難中に亡くし，同じ悔しい思いを教師として二度と繰り返したくないと意を決して，父親と同じ教師の道を目指して勉学中の大学２年生もいます。さらに津波に自身も巻き込まれながらも奇跡的に生還したのですが，教え子や同僚を失い，新築の自宅も失い，ローンを払いながら，統廃合した被災地の中学校で奮闘し続けている先生もおられます。これはほんの一例ですけれども，それぞれが味わった苦しみ，悲しみはそれぞれに深く，且つまた千差万別です。

本日２０１５年８月１１日，あれからちょうど４年と５ヶ月になりますが，この４年５ヶ月という歳月はこうした子どもや教師の心の傷を少しでも癒したでしょうか。少なくとも，彼，彼女たちがあの時の恐怖や苦痛を忘れたり，失った人やものを忘れたことは決してないでしょう。被災した子どもや教師の心的外傷の深さを思うならば，彼，彼女たちの多くが，先ほど本間先生がおっしゃられたように PTSD などの精神疾患を患うことなく，表面化させず，日々の学業や仕事をこなし，たとえ表面的であっても明るく元気に過ごしていることに，深い驚きと畏敬の念を感じないわけにはいられません。深刻な外傷を内に秘めた子どもや教師が前向きに日々を送ることができるのは，当人のがんばりはもちろんのこと，それに加えて周囲のケアや支えがあってこそでしょう。被災地の学校の聞き取りや見学を通してわかってきたのは，こうしたケアには大きく二つの種類があるということです。

一つは，カウンセリングなどの医療的な，専門的なケアです。それはたわいない雑談に耳を傾けることから，専門的なカウンセリングにまで至ります。私が知る限りでも，教育現場にはカウンセリングについての理解，連携がかなり浸透しています。２０年前の阪神大震災以来，災害後のストレス症状についての理解と支援方法は，学校現場でも広く共有され，その手法も大変高度になっていると思われます。専門医との連携も驚くほどよくなされているケースが多いですし，専門医も県内外から手厚くサポートしてくれています。こうした医療的ケアについてはフロアの他の先生方のお話のとおりだと思います。

もう一つ，私として強調したいのは，学習活動を含む文化活動に秘められたケア機能です。意外に思われるかもしれませんが，運動会とか学芸会などの学校行事，あるいはふるさと発見とかいった学習にはケア的な機能があって，被災した子どもや教師，ひいては保護者や地域住民を，暗にケアしていると考えられます。外傷を抱えながらも，それが表面化しない子どもや教師が大変多くいます。こうしたいわゆる普通に明るく日々を送っている子どもや教師にとって，あたりまえの学校生活や学習，中でもとりわけ力を入れる行事は，子どもや教師が外傷を受け止め，跳ね返していく力，いわゆるレジリエンス，弾力性とか，回復力とか快活さというふうに訳されますが，そういうレジリエンスの力を高めていると思われます。運動会とか学芸

会は，どの学校でもドラマティックですし感動的です。ただ被災地の学校のそれは独特の奥深い感動をたたえていると思われます。被災地の運動会や学芸会や課外活動には，被災した地元にまつわるものが多く見られます。例えば，「ふるさと発見学習」では，地元の自然に親しみ，地元の漁業や農業を体験的に学習します。運動会では，学校に代々伝わる和太鼓の演奏とか御神楽などの伝統芸能が盛り込まれ，一種の祝祭的な高揚感に包まれます。被災地ではご存知のとおり，保護者や地区住民は仮設住宅とか借り上げ住宅，復興住宅，再建した自宅に散り散りになって住んでいます。しかし，運動会や学芸会には，住民あげて参加し，かつての地元の自然と文化に思いを馳せ，地元の未来を思い，一体感を味わいます。「未来の○○まち物語」とか，「○○まち遍歴」といった地元をテーマにした演劇を上演するケースもあります。かつての地元は津波で破壊され，この破壊は深刻な外傷と連動していますので，地元をテーマにすることは精神分析的には，外傷への直面化，一種のコンフロンテーションです。外傷に向き合うことは，リスクも伴いますが，外傷と折り合いをつける重要なワン・ステップにもなります。こうした外傷の向き合い方，行事等をとおした向き合い方は，従来の精神分析的な理解とはやや異なる特徴を持っていると思います。二つの特徴をあげたいと思いますが，一つには，自分の心の内面に向き合うというよりも，内面が関与した外の世界，地元の自然とか労働文化というものに向き合うという，一種の間接的な向き合い方である点に特徴があると思います。もう一点の特徴としては，自分一人でその外傷と向き合ったり，カウンセラーとともに向き合うだけではなくて，むしろ共に外傷を負った友達とか両親とか地域の複数の人々と一緒に，集団ないしコミュニティとして外傷に向き合う，外傷と連動する自然文化に向き合うという特徴を備えていると思います。これが心のケアに有効に働いているようなのです。これは今回の大震災後の学校行事を見る中で新しく気づかされたことです。

地元の自然や労働や伝統文化を学ぶという活動は一種の文化活動です。「文化」は英語の「カルチャー」ですが，この「カルチャー」という英語は「アグリ・カルチャー」つまり，「農業」とか「農耕」，これと一体化となった言葉で，もともとは古代ローマ時代のラテン語「クルトゥーレ」という言葉を語源としていて，この言葉は「慈しみ，ケアする」という本来の意味を持っていました。「カルチャー」や「アグリカルチャー」にはもともと「慈しみ，ケアする」という意味が込められていたのです。

被災地の文化活動，とくに行事や「ふるさと発見」のような校外学習を見ていますと，この「カルチャー」が持つ，本来の「慈しみ，ケアする」働きを強く実感させられます。被災地の学校行事に触れると，子ども，教師，保護者，地域住民が一つのコミュニティとして行事に盛り込まれた地元を改めて文化的に耕し慈しもうとしていることがわかります。そして，こうした文化活動が，跳ね返るようにして，演じたり見守ってしたりしているコミュニティの構成員をケアすることになり，そのおかげで，子どもも教師もひいては保護者や地域住民も元気を取り戻しているように見えます。確かに教師はその土地の人間でない場合も少なくありません。しかし，そうした教師にとっても，教師としての大きな励ましと癒しは，目の前の子どもが明るく元気に成長していくことです。被災した地元の自然と文化を直視し，地元を誇らかに謳い上げ，強くたくましく生きていこうとする子どもの姿は，教師たちに希望と支えを与えているようです。つまり深く傷つき，長期にわたって疲労困憊した教師たちを支え，かつ癒しているのは，実は外傷を受け止め乗り越えていく，しなやかな，つまりレジリエントな子どものたくましい姿のように見えるのです。

では，被災して外傷を負った子どもたち，教師，さらには保護者や地域住民のために，被災地から離れた私たちにできることはなんでしょうか。被災地から離れた私たちが，少しでも力になれることはないでしょうか。このことを考えるためにヒントを与えてくれた，ある大学１年生の言葉を紹介したいと思います。その大学１年生は，東日本大震災発生当時，津波が襲来した沿岸部の学校にいて，当時中学２年生でした。彼自身間一髪で津波を逃れたのですが，その直後，津波にのまれて心肺停止状態になった地域住民を目にすることになります。彼は心臓マッサージをしましたが，その男性を助けることはできませんでした。その無念から，その少年は，将来の夢を消防士と決めました。
現在消防士を目指して，福祉行政や救急救命を

学び，民間の防災士の資格をすでに所得しました。その彼は，こう語りました。「『出身どこ？』って聞かれて『南三陸』っていうと，『それどこ？岩手？』って周りに言われて…。県外の人ならまだしも，宮城県内の人にそう言われて，あんなにメディアで震災のことが取り上げられているのに，どうしてそんなに関心がないの?!って憤りを感じます。」この言葉からわかることは，あの時辛い経験をした人間にとって，周囲の人々があの災害を忘れること，あの災害に無関心になるということは堪え難い苦痛であるということです。被害の少なかった周囲の人々にとってあの災害がなかったことになってしまうことは，被災者の外傷にさらなる外傷を上塗りすることになると考えられます。ここから，被災した子どもや教師のために私たちにできることの一つが明確になるように思います。それはいわゆる温度差というものを解消し，風化に抵抗することです。大震災を忘れるのではなく，あのときの被害を繰り返し思い出し，心に刻み，何らかの行動に結びつけることです。震災のことを思い出して受け止め，行動に結びつける方法は複数あると考えられます。そして，その方法は人それぞれに異なるでしょう。

私なりの方法を最後に二つ紹介させていただきます。一つは先ほど紹介した少年のようにあの災害を受け止め，乗り越え生きている児童生徒を広くみんなで心から評価することです。このことは，そうした児童生徒を賞賛すると同時に，それを育てている先生方を間接的に評価することにつながると思います。もう一つは，東日本大震災のときに学校が果たした役割，また，果たしきれなかった課題を洗い出し，教訓として今後の大災害に生かしていくことです。試算では，あの災害で宮城県内の児童生徒の４３０名の命が奪われ，うち７５名は避難がうまくいかなかったためであり，他は引き渡しの後，あるいは自宅や町にいて奪われた命でした。一方，校長や教頭のリーダーシップの下，地域住民との協力によって試算では２０００名近い命が津波から守られました。校長先生たちは２０００名近い命を守りました。内陸部の学校も，避難所として奮闘しました。最大で３００人以上の避難者を受け入れた県内の小中学校は２１２校にも及びます。最大１０００人以上を受け入れた学校も６８校に上ります。こうした経験から課題や教訓を引き出し，今後の災害に生かすべく全国に発信することも，私たちは忘れていないという強いメッセージですし，被災地の子どもや教師を，離れた場所から粘り強く応援することにつながるのではないでしょうか。

私の拙い発表は以上で終わりたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

加藤　続いて髙橋総子先生からご提言をいただきます。先生にはスクールカウンセラーの統括の立場から，お話しいただきます。

子どもの心のケアのために学校ができること

髙橋　みなさんこんにちは。宮城県臨床心理士会でスクールカウンセラー担当理事をしております，髙橋と申します。よろしくお願いいたします。本間先生はじめ，他の先生方からもいろいろとお話が出ましたので，重なるところはあまりお話ししないで私なりの提言というものをお話ししていきたいと思います。

スクールカウンセラーとしてこれまで多くの学校の先生方と関わってきましたが，震災後は先生方は本当に学校を日常に戻すためにあらゆる努力をなさってきたことと思います。学校に配置されているスクールカウンセラーからも，頑張っている先生方がとても疲弊されているのではないか，という心配の声を多く寄せられました。本間先生もお話されましたように，幸いにして，と言いましょうか，学校で被災をしたために，先生方に守られて，そして大切にされてきた子どもたちが本当に救われたのではないかと思います。

今年度は震災後５年目ということで，表面的な震災によるトラウマというものはなかなか見

えにくくなっているのですが，新たなストレスの蓄積というものが子どもに影響しているように感じます。子どもの状態が二極化し，格差が開いているようにも見えます。いろいろな環境の変化もありますが，心のケア支援チーム等で学校訪問をしていますと，気になるお子さんたちは親のゆとりがないために十分に甘えてこられなかった子どもたち，そして心配をかけたくないと無理に頑張ってきている子どもたち，不安定な大人たちを見て悩みを表現せずに我慢してきている子どもたち，そういう子どもたちがいろいろな行動として表現してきているなあと感じております。現在，小学生のほとんどは震災後には乳幼児だった子どもになっています。当時，小学校低学年であった子どもたちは中学校に進学しています。乳幼児だった子どもたちは言語化できない年齢でしたので，恐怖や不安といった，感覚として残っている部分が大変多いと思います。いち早く家族の適切なケアを受けられた子どもは回復が早いかもしれませんが，家族の状況が不安定な場合は回復には時間がかかります。学校の中でいろいろな症状，問題行動を出してくる子どもたちに対して，ただ問題行動だととらえるのではなく，震災と関連しているのではないかと必ず頭のどこかで考えていかなければいけないのだと感じます。

それから，県内県外からの転入生がたくさんの学校の中に入ってきております。今後も復興公営住宅等の整備に伴い，転入，転出するお子さんたちが増えていきますので，そういうお子さんたちが新しい環境になじめるように十分なケアが必要なのではないかと感じます。学校現場でも震災が風化してきていると危惧されるわけですけれども，先生方も，人事異動で被災体験のない教職員が異動してくるなど，状況も変化してきています。震災体験を語り継ぐこと，そして教職員や私たちスクールカウンセラーの研修を引き続き継続していくことが重要になっています。

子どもの震災当時の状況がなかなかわからないままに学校で子どもたちに向きあわなればならないということが今後も増えてくると思うのですが，子どもの健康調査票の作成がとても重要になっています。震災当時その子どもがどこでどのように被災をしたのか，その時の家族の状況はどうだったのかについて丁寧な聞き取りを行い記録しておくことがとても重要になっていると思います。

資料には玉浦中学校の例を挙げさせていただきましたけれども，他にもこのような取組をしていた学校はたくさんあったと思います。心配な生徒を早い時期にスクリーニングする，危機対応におけるトリアージのようなものですけれども，そういうことをして心配な生徒をいち早く学校全体でケアしていく取り組みが大事になっています。ただ，それには大変なエネルギーと時間がかかると考えていると思うのですが，先生方のご負担をできるだけ増やさないで，学校の中で行うことを考えると良いと思います。

震災後は，すぐに心のケアという言葉が飛び交い，学校現場が不安に陥ったり，あるいは焦りを感じてしまったという報告もたくさん寄せられています。心のケアは特別なことをしなくてもこれまで学校でそれぞれ行ってきた健康調査，あるいは健康観察を少し丁寧に行うことで，可能になります。特に，今までの健康調査，健康観察に加え，少し震災体験の有無であるとか被災の状況についても項目を付け加える。そして，低年齢，低学年であればあるほど体の反応として出てきやすいものですから，体調についての調査も大事になってきます。それからそのお子さんが学校の中でどのように生活しているか，友だちとうまくやっていけているかについても触れていけると実りのある結果が出てくるのではないかと思います。さらに，各学年でそのお子さんに対してどういう対応をしたか，どういう対応が必要だったか，あるいは良かった対応，こういうことをして良かったということを記入していく申し送りができる個人調査票が非常に今後は必要になると思います。さらに保護者へのアンケートを，１年に１回でも良いですので実施すると良いと思います。特に新入学の児童生徒に対して，例えば１１月頃に行う新入学児童の健康診断の時期であるとか，あるいは中学，高校の予備登校の時に，ちょっとした保護者向けのアンケートを行う。こういう時には全部の保護者が出席しますので，実施すると良いと思います。小さい子どもたちには訳のわからない恐怖や不安を抱えるのではなく，自分はどこで震災に遭い，その後どのように避難してきたのか，あるいはどこの学校に入学してどこの学校に転校したのかストーリーがわかるということもとても大事になってくると思います。その調査の結果を申し送りをすることが重

要になります。進級または進学の際に，情報を伝え小中高が連携して適切な支援を継続していくことが大切になってきます。それは中一ギャップを防ぐことにもつながっていきますし，子どもの様子を先生方が把握していることで，子どもの人間関係あるいはいじめ等の問題にもきちんと目を配ることができると思っています。

このように考えますと，これは何も被災した子どもたちだけではなくで，全ての子どもにとって必要なことだと考えられます。緊急時の学校現場においては，やはり校長先生のリーダーシップのもとに混乱を防止するような指示系統を明確にした取組が必要です。それは心のケアについても同様で，校長先生がきちんと心のケアについて意識を持っていらっしゃると，早い時期に取組ができ，学校全体でサポートをすることが可能になっていきます。スクールカウンセラー，学校臨床心理士と私たちは言っておりますが，臨床心理士がこれまでも，事件・事故あるいは災害における緊急支援をずっと行ってきていますし，研修も重ねています。学校の中でそういう時にスクールカウンセラーができることはそんなに多くないと思いますが，むしろスクールカウンセラーの仕事というのは個別の対応よりは先生方のサポートをするのが主な仕事ではないかと感じます。先生方は子どもの様子を毎日見ていますし，小さな変化にもすぐ気付くことができる強みを持ってるわけです。養護の先生は子どもの体のことから介入することができます。子どもは言語化が苦手なほど身体症状としてサインを出しますので，養護の先生が見逃さないということが効果があると思います。言語化することはとても必要なことなのですけれど，無理に話をさせようとしなくても，子ども自身は話しても大丈夫と感じた時に話し始めます。そういう意味で，子どもの心のケアは近くに安心できる，信頼できる大人が存在することがとても大事だと思います。スクールカウンセラーは先生方と情報を共有しつつ，子どもにとってどんな支援が必要かを一緒に考える役目ではないかと考えます。見立てをするということが大事な仕事になります。そのお子さんの症状とか訴えが病的なものであるか，あるいは外部機関につながなくてはならないものであるかをきちんと見立てることが主な役目になるのではないかと思います。スクールカウンセラーと先生が一緒に考えることが学校の中では大事なことになります。学校の中で子どもを支援するときには目先のことではなくて，やはり将来を考えたビジョンを持つことがとても大事になります。子どもが回復するために，資料にも書きましたとおり，所属感・つながり・有能感・未来への目標について具体的にどのように支援していくのかを一緒に考えることで，学校の中に強力な支援体制を作ることが可能になります。それは，全ての子どもにとって居心地の良い学校，自己肯定感を感じられる学校になっていくことを意味しています。学校という場は，様々な力を持っていると信じています。所属感やつながりがもてるように，できるだけ多くの先生が笑顔で子どもに話しかけてほしい，そして子どもが大切にされていると感じてほしいと願っています。また，仲間とつながることの大切さも大事になります。そして，子どもの持っている力を引き出し，小さなことでも良いので，きちんと評価してほめていくこと，子どもの有能観を育ててほしいと思います。目標を設定する支援をする，子ども自身がそれを決めていくことを応援してほしいと思います。

それから学校においては子どもの支援だけではなくて保護者の支援も大事な仕事になります。保護者は大人です。大人の回復がとても遅れていると感じます。大人の回復にも学校は重要な役割を担うことができます。地域のコミュニティ，あるいはつながりを失った大人にとって，やはり学校をよりどころとして地域とのつながり，新たな故郷を作りだすことができれば，大人が安定していく。それが子どもに安全感・安心感を与えることになり，心のケアにもつながると感じます。子どもの心のケアのためにできることはたくさんありますので，私は学校にとても期待しているのですけれども，合わせて先生方自身の心のケアもぜひないがしろにしないでほしいと思います。校長先生方には頑張り過ぎず，抱え込まず，そして愚痴を言える職場環境をつくることをぜひお願いして，お話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

加藤　髙橋先生ありがとうございました。４人目のパネリストは佐藤正幸先生です。現職の校長先生であり，学校の管理監督者として震災直後からずっと現場から発信なさっていらした先生のご報告とご提言です。

「未来を見据えて･･･」

佐藤　こんにちは。気仙沼市立条南中学校の佐藤正幸です。今現在抱え込んでいます。すべての先生方の代表としてのプレッシャーがかなりかかっておりまして，先ほどの本間先生のご講演，それから，今パネリスト本間先生含め３名の方のお話しで今日のねらいは達せられたのではないかと思っているところですが，どうぞよろしくお願いしたいと思います。

本日ご参会の皆様の中には，東日本大震災時に，勤務校，地域で，あるいはご家族で，そしてご自身が，直接，または間接的に大変な思いとご苦労をなさった方が大勢います。一方，被災地ではなくて，被災とは無縁で，自分はこれで良いのかと思い悩む先生方もいたと思います。したがいまして私は，皆様方の代表ということではなくて，本日のテーマについて，私なりの思い，考えを述べさせていただきますことをご了承いただきたいと思います。

人は生かされて生きています。生きているということは誰かの世話になっている，生きているということは誰かに恩返しをしている。私たちは生かされました。生かされたものとして，人や物の命，これを大切にして，智慧を働かせていくことが与えられた責務だと思っています。

被災地にあって，あの時の子どもは今，ということを考えてみますと，現在の高校３年生は当時中学１年生，小学１年生が当時２歳でした。被災地における当時の中学生や高校生は惨状に愕然としながらも，避難場所や避難所では大人たちと力を合わせ，目の前で起きている命との対峙，まさに生き抜く力の実践に知恵を働かせ，人のために全力を尽くしました。我が身を振り返る間もなく。小学生は，地震，その後の津波から命からがら避難し，ただただ目の前の惨劇に恐怖に慄き泣き叫び，言葉がありませんでした。あれから数年たって，先ほどのお話にもありましたように，ようやくその時の事について心を開き話し始めることができている子どももいます。また，被災地において，震災直後に小学生の子どもの心のケアを積極的に行わなかった，あるいは取り組まなかった，ということが，その子どもたちが中学校に進んでから，様々な症状や障害が生じ，不登校の一因になった，という例も聞いております。

先ほど，本間先生のご講演にもありましたが，被災地の中で何事もなかったかのように生きる，実は私が勤務した学校でも，父親を亡くした中学生の兄妹がおりました。祖父母，母親とともに明るく精一杯学校生活を送っているように見受けられました。しかし，兵庫県からの緊急支援カウンセラーのスクリーニングから，「かなりこの子は病んでいますよ」ということがわかり，教職員で情報共有と共に，カウンセリング等によって心のケアを行ったこともありました。その子は受験期の不安にも，態度，行動として表には出さず，明るく振る舞っていました。もっと早く気付けばと思いました。

また，家族や住居の流出により，今まで慣れ親しんだところを離れ生活を送っていましたが，移り住んだ土地でうまくいかず，親が離れて生計を営むことになり，被災地に戻ってきて，両親の板挟みになっているという生徒もいます。３月１１日が近づいてくると，いわゆる記念日反応を示す子どももいます。家族を失った子，友だちを失った子，両親を失い，いわゆる災害弱者である祖父母や親戚と一緒に生活をしている子，仮設住宅での生活，運動環境の変化，スクールバス通学での学校生活の時間的な制約，就学援助を受ける児童生徒の増加など，直接的，間接的，地域的な生活環境の急激な変化が，子どもたちの心や体に様々な影響を及ぼしましたし，今現在もそれは続いています。

たとえば，震災前は，「見ざる」・「聞かざる」・「言わざる」で済んでいたことが，震災後は，仮設住宅は一間か二間，隣の声が聞こえる，狭くて薄い生活空間のため，両親や祖父母の関係や家庭の経済面や，これまで見ないで，

聞かないで済んでいたことが否が応でも見え，聞こえその影響のストレスから言わないで済んでいたことを言わなければならなかったり，耐用年数から生じる仮設住宅の劣化と復興の遅れがさらなるストレスを増加させ，再建への意欲を減退させています。

そのような現状にありますが，経済格差が教育格差を生まないように，小・中・高・特別支援学校，それぞれに様々な学習支援と言いますか，当然の学習活動が実施されているということは言うまでもありません。

さて，教職員はどうでしょう。事例を挙げればきりがありませんが，先ほど田端先生にお話しいただきましたので，省略させていただきます。ご参会の皆様には，管理職として，第一に児童生徒とその家族の命を心配し，次に教職員，そして学校地域，それから自分の家族，最後にようやく自分自身であったのではないかと思います。

私の心に，ある先輩校長の一言が今でも残っています。「正幸さん，被災地の校長というのはさ，子どもの前では明るく元気でなければならないのさ。」その先生は，自分の病気を悟り，誰にも迷惑をかけまいと，定年まで任期を７か月残した８月に退職し，そのわずか１か月後に天国に旅立ちました。震災が直接影響した病ではありません。しかしながら頑張っていたことは確かです。

１９９５年の阪神淡路大震災以降，心のケアが注目され，やはり大きな災害の際には現地に心のケアチームが派遣されました。このたびの震災直後から全国の自治体，大学，学会など，精神科医を中止とする心のケアチームが派遣され，本県のスクールカウンセラーとともに，教職員と協力し，児童生徒の対応，そして支援に当たっていただきました。支援と指導に取り組む教職員自身の相談にも応じていただき，大変ありがたく感謝しております。身体的な不定愁訴から，経済的不安まで，被災者の抱える多様な不安の解消に向け，まだ支援の継続が必要と感じており，要請をしているところではありますが，この場をお借りいたしまして，今日ご参会の８００名を超える皆様とともに，改めて，支援の継続をお願いしたいと思います。

ただ，この支援はいつまでも続くというわけではありません。宮城県内で自分たちで再建に向けて頑張っていこうというシステム作りが大切と思います。合わせて，幼・小・中，高・特別支援学校の連携も不可欠なものと思います。

ちょうど時間になりました。校長のリーダーシップと言いますけれども，私は校長としていつも思っていることは，何事も，その立場に立った者しか本当のところは分からない。でもすべてその立場に立つことはできません。大事なことは，分かろうとする気持ちだと思います。分かろうとする，気持ちが，その気持ちを持つことが大事だと思います。

被災した児童生徒の主体性を最大限に尊重しながら，見守り，寄り添う気持ちを持ち続けたいと思います。本当は思い出したくないし，口に出したくもない，でもそれは逃げることでもあると思います。やはりそれを乗り越えていかなければならないと思っています。ガードを固めてばかりいないで，リスクを覚悟で打って出れば得るものも大きいと思います。失ったものは大きく，耐えがたく，尊いものですが，得たものもたくさんあります。

今あること，ものを生かして，子どもたちの未来に向けての再生に，子どもそして私たちそれぞれが一歩を踏み出せるよう，子どもにとって後押しではなく，共に歩んでいきたい，歩んで参りたいと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

加藤　佐藤先生ありがとうございました。短い時間ではございましたけれども，４名のパネリストの方々から，それぞれのご提言をいただきました。

ここからは，フロアの皆様からご質問やご意見などを頂戴したいと思います。いかがでしょうか。お手が挙がりましたので，お願いします。

庄子　白石市立白川中学校の庄司毅と申します。

４名のパネリストの方々からそれぞれの専門的な立場でお話いただき本当にありがとうございました。聞いていて，心に響くところもありました。４名の方にアドバイスをいただきたいと思います。

子どもたちの心の復興のために，管理職として心掛けてほしいこと，あるいは心掛けていることなどがありましたら，簡潔にアドバイスをいただけたらと思います。よろしくお願いします。

加藤　ありがとうございます。それでは，一言ずつ，それぞれの立場からお願いいたします。

本間　私が一番大事だと思うのは，管理職の方は外の世界とつながってほしいことです。つまり，学校だけですべてを片付けるということには限界があります。対応の難しい子どもが発生した時に，学校の機能で全部対応していくというのは無理があります。そういった時に外の資源とつながる，外の相談するところを持つことがとても大事なことだと思います。

宮城県では，先ほどのスライドでも示したように，子ども総合センターには学校の先生が５人配属されています。児童相談所にも１０名位が配属されています。保健福祉部と教育庁の連携が，このぐらいとれている県はないです。ぜひとも，学校でお困りの時には，外とつながる，特に管理職の先生が外とつながる役割を持って，渉外係というか，外と混ざり合い外とつながるという点が，管理職の先生の一番大事なテーマだと思っています。

田端　今の本間先生とかなり重なる部分がありますけれども，ある被災地の校長先生の言葉が印象に残っていました。「地域あっての町あっての学校だし，学校というのは地域ということで，地域とのつながりが災害時に生きた。そして，また心の復興の教育のためにも地域との連携が必要だった。」これは被災した学校ばかりではなくて，被災していない内陸部でも同じだと思います。その地域との連携の一つに防災訓練，危機管理ということを，地域を巻き込んで，学校が災害拠点となってしまいますけれども，災害拠点という意識を持って，地域を巻き込んで防災訓練をするということも一つあると思います。

それから，地域の文化を掘り起こしていくこともぜひやっていただきたいと思います。

高橋　本間先生と田端先生から，地域も含めて外とのつながりのお話が出ましたけれども，私は校内連携ということをお話ししたいと思います。

スクールカウンセラーとして学校を訪問して，担任の先生がいろいろ困っていたり，悩んでいても，カウンセラーに相談しにくい，あるいは「そんなこと担任一人で解決できないのか」と思われてしまうことで，なかなか相談にみえられない先生方がいるように感じております。校長先生が「気軽に利用して来い」と一言言っていただきたいと思っております。

佐藤　三つ，私の場合お話したいと思います。

一つは柔軟性を持つ。これは震災後，例えば区域外通学が震災以前と違って多くなりました。それから，スクールバス通学も多くなりました。また地域の状況が一変しており，例えば，社会体育施設がなくなって体育館の解放や，校庭に仮設住宅がありますが，むしろ校庭の仮設住宅に関しては少なくとも私が勤務していた学校，あるいは私たちの町気仙沼では「早く出ていってほしい」と生徒は思っていません。狭いながらも頑張っています。２００メートルのトラックが取れなくても運動会を実施します。部活動も行います。工夫しています。仮設住宅があることをむしろチャンスだと捉え，仮設の方々との交流を深めております。これは，現在勤務している条南中学校でも同じです。

二つ目は，生徒指導上では不登校，生徒のトラブルなどを事実だけを見ないで真実を見ていきたいことです。事実というのは，見たあるいは捉えたとおりです。例えば，（叩こうとしている姿）私が高橋先生を叩こうとしていた。今確かに叩こうとしていたのですが，いろいろな角度から見てもそう見える。でも，「ここに，ハエがついていて取ろうとしていたんですよ」ということもあります。確かに，ハエがいました。これは裏付けを必ず取るということです。警察の方は裏を取ると言いますけれど，事実だけではなくてその裏にあるもの，なぜそうなったのか，本当の中身はどうだったのか，という「問い返す」ことも大事だと思います。特に，様々なストレスを抱えている子がいますので，

そのような対応を大切にしています。

三つ目としては，震災に遭ったから「ああ，いいよ」「勘弁しますよ」ではなく，是は是，非は非であり，「いけないことはいけない」「これはこうだよ」ということをしっかりと指導していく必要があると思います。以上，三つです。

加藤　ありがとうございました。

それでは，他にいかがでしょうか。

須藤　美里町立南郷小学校の須藤と申します。今日は，どうもありがとうございます。

本校は，大崎地区の田園の真ん中にある学校で，平成２４年度から私はお世話になっております。大震災では，インフラの大きな破壊はありましたが，概ね学校再開はうまくいった学校です。ところが去年，今年と立て続けに複雑な相談を受けました。

行動化の激しいもので，保護者の方と関係機関とともに考え合いました。その時まで，私はその子たちをずっと見てきたのですけれど，震災との関わりという仮説を立てていませんでした。内陸部にあったためです。ところが，ここにきて問題が深刻化してきて，校長として改めて保護者・家族と面接を繰り返しました。その時，ジェノグラムを見ますと，例えば，関係のある方が沿岸部出身で大きな喪失を体験している。家族にその喪失による影響があり，子どもの症状に出ていることに気づき合いました。「あっこれが阪神淡路で起きた３年後から増大してくる問題の実態なのか」と，今実感しているところです。

本校では小学校と中学校が隣り合っています。スクールカウンセラーが中学校に毎週来ます。小学校には月１回くらいのペースです。そこで，私自身だけの見立てでは危ういと感じ，スクールカウンセラーの方と一緒にケースを見てきました。関係機関と連携した取り組み以後も，定期的な面接，カウンセリングを続けていただいています。

私はここで，髙橋先生にお願いというか，今後どのような計画があるのかお尋ねしたいと思います。義務教育課の教育相談事業の最も大きいものの一つがスクールカウンセラーの配置になっていますけれど，小学校では圧倒的に足りないと思います。本間先生はじめ先生方の報告を聞いて，中学校ではその問題が顕在化しやすいから派遣回数も多いと思うのですが，小学校でももっと派遣回数を増やしていただくと，親と早くつながり，親の資質を早く学校が見つけることが出来れば，若い親の養育観を支え幼い子供を早い段階で救うことが出来ると考えています。

そこで，スクールカウンセラーの配置，人数を小学校も中学校並みにしていただければ，ここにいる多くの校長はとても助かるのではないかなと思います。これから本県に起きてくる問題を予測した時に，まさに，そこに一つの希望というか可能性というか，お願いを感じております。教育行政のことですので，この場でお答えづらいとは思いますが，事例としてスクールカウンセラーは非常に有効であることを実感しているところです。

以上でございます。よろしくお願いします。

加藤　ありがとうございます。では，髙橋先生，小学校へのスクールカウンセラーの配置について，よろしくお願いします。

髙橋　スクールカウンセラーを活用していただいて大変ありがとうございます。配置に関しては，実は中学校への配置は平成１３年度から毎年のように増やしてきました。小学校への配置は，奇しくも震災の翌年度，平成２３年度から行うことが，２２年度からすでに決まっていました。震災後のケアに間に合ったとも言えると思います。ただ小学校への配置は市町村単位で，各市町村に何名という配置で２３年度はスタートしました。その後，学校の要望も大きく，単独でこの学校にこの方をという配置も進んできています。ただ，これは内輪の話になりますが，スクールカウンセラーの中でも臨床心理士の数は半分少しです。ほとんどの方は準ずる方か，心理のトレーニングを受けていない方です。さわやか相談を経験された方とか地域の相談を経験された方がほとんどの割合で，退職した校長先生方がかなり多くなっています。臨床心理

士の数がなかなか増えません。それは，先ほどご質問された先生のお話にもありましたように，行政の問題もありますが，何しろ単年の雇用で不安定な身分ですから，何年か経験された方はもっと安定した職場の方に抜けてしまう事があり，今スクールカウンセラーをしている臨床心理士は１００名を少し超える位の人数です。頭打ちでそれ以上増えないので，その人数で小中高全部をまかなっている現状です。その方々も児童相談所の勤務をしていたり，不登校相談センターの勤務をしていたり，教育事務所の勤務をしていたり，掛け持ちで仕事をしています。ですから，なかなかスクールカウンセラーだけを毎日仕事にしている方は増えていない状態です。

私自身も，今は小学校のみのスクールカウンセラーをしていますが，以前は高校も随分経験しました。中学校でも経験したのですが，経験すればするほど，もっと幼い時期からの対応が必要だと実感しております。高校に行くと，「これは中学校で何とかしなければ」，中学校に行けば「これは小学校でやっておくべきことだったな」と感じました。今，小学校ではもっと前，「乳幼児期からの対応が必要だな」と実感することがあります。
そういう意味では，小学校の配置はとても重要だと思っております。

今後は，県外のスクールカウンセラーの仲間が減ってくると思われますので，仕組みづくりを考える上で，いろいろな子どもに対応する担当者と問題の程度を見立てる方を分けていかなければいけないと私自身は思っております。今の先生方の対応で良いのかどうか，あるいは外部につなげた方が良いのかどうか，あるいはカウンセリングだけで大丈夫なのかどうか，その判断をする役目の者と，具体的に子どもとこういう遊びをしていきましょうとか，学習支援をしていきましょうという役割を分けていかなければならないと思っています。このような私の考えです。よろしいでしょうか。

加藤　ありがとうございました。

それでは，わたしからも一つ先生方にお伺いします。中学生や高校生などの思春期以降になると，もともと必要以上にはあまり関わられたくないが，でもどこかでは見てもらいたいという相反するようなところがあります。このような中学生，高校生生徒に対する対応の配慮や工夫について，本間先生，髙橋先生，佐藤先生，何かお知恵がございましたら学校の先生方にお伝えください。

本間　一つの例として我々のセンターのクリニックに中学生が紹介されて来ます。その子どもたちは，ほとんどが自分で来たくない子どもたちです。学校の先生達に「行け」と言われて，親から「行くぞ」と言われて仕方なく来るのです。その子どもたちと面接する時に大事なことは，子どもたちが仕方なく来たというところを汲むことです。例えば，まずは子どもたちが答えられやすい質問，「今日は，子ども総合センターまで車で来たの？」「電車で来たの？」と聞いたり，あるいは「いつ，お母さんにここに来るっていうこと聞いたの？」など，答えられやすい質問をして「君はここに来たかったの？来たくなかったの？」と聞きます。大部分が「来たくなかった」と答えます。でも，「仕方ないから来た」と，この時期の子どもは強がりを言う。自分の弱さを認めることはとても辛いことです。自分の弱さを認めると自分が崩れてしまうのではないかということで，相談をしたいことをなかなか自分自身で認めない，また，弱さを出すことによって崩れることもあるのです。そのところを丁寧に聞いていきます。

学校の先生であれば，子どもが時々保健室に行くとか，頭が痛いとかお腹が痛いとか，あるいは先生に逆らうとか，その時の気持ちを聞いていくのが一番良い。腹が立っているや頭にきていることは，彼らが一番話し易いことなので，そこを聞いていくのが良いです。ただ，中には，「なぜ，こういうことをしたの？」と質問がありますが，「なぜ？」という質問は，子どもにとってすごく受け入れにくい質問です。面接の大事なところで，答えられやすいことと，人に頼りたくない気持ちを受け止めながら，頼ってもらうようにします。

もう一つは，このような子どもの場合は親が困っているわけです。受診したいと思う子どもはたくさんいますが，受診したくても，親が働いている不登校の子どもとか，いろいろな問題が起きている子どもは，まず親との関係性を作っていきます。親と何回か面接をすると，やがて子どもも来るようになり，子どもの不安がすくすく解消されていきます。親が少しでも相談

意欲を持つようになると外側から少しずつ子どもも引きずられていきます。

高橋　はい，本間先生は外部機関で子どもの面接をされていますが，私はスクールカウンセラーとして高校や中学校でお話しをする時は，やはり「相談に来たくなかったよね」ということを大事にします。でも「来てくれてありがとう」ということからスタートします。

そして，やはり大人が批判をしてはいけないと思います。その子どもが，どうしてそのように思ってしまったのかいうことです。とても重症と言えるリストカットを繰り返しているお子さんたち，あるいは摂食障害などのお子さんたちもたくさん見てきましたけれど，そうせざるを得ない心境というのを必ず持っています。その心境を聞いていきます。「辛いよね」と，「そういうことを本当はしたくなかったけど，しないではいられなかったよね」と、子どもの気持ちを大事にするように接していきます。そうすると，次第に打ち解けて，どんな時にしたくなるのか，あるいはその代わりにどういうことをしたらいいのか，をこちらが命令したり指示したりするのではなく，その子ども自身が考えていくこと、その子どもが出来そうなことに主体的に取り組むことが，一番の解決ではないかと思います。大人が何かさせようとか，命令をして解決してやろうという姿勢なら，子どもたちは変わらないと思います。

佐藤　心のケアチームが PTSD を中心とする問題が多発するだろうと予測して支援計画を立てて被災地に来ました。ところが，「心のケアチームです」と避難所に行くと，「あっ俺関係ない，俺ちがうよ」「帰らいん，帰らいん」とはつけ（邪魔者扱い）にされた，言葉が悪いですが排除されたと聞いております。「自分は関係ない」という人たちに，そのチームの方が最初から心のケアを前面に出したわけではもちろんありませんが，まずは傾聴するとか，一緒にそこにいることが安心感を与えると思います。それから，今高橋先生も話されましたけれど「なぜ，なぜ」ということは駄目です。自然に話す，吐き出す。自然に吐き出させことで楽な気持ちになる。

その際に信頼関係というのが大切であると思います。本校の実際の例ですが，弁当持参の日にある生徒が弁当を忘れてきました。朝のうちに弁当を忘れた生徒は手を挙げたのか挙げないのかはわかりませんが，後になって弁当を忘れたことが出てきました。その時に「なんであなた，あの時手を挙げなかったの。卓球大会に向けての練習にも参加させないから」と担任が話をしました。その生徒は楽しみにしていたその練習ができない。しかも，その子の父親は父子家庭で弁当のことを急に言われても準備ができない家庭です。子どもは学校を逃げ出しました。ポイントは手を挙げた挙げないではなく「お昼を食べて午後の活動の卓球の練習に参加するためにどうしたらいい？」「じゃあ，弁当どうする。お父さん持ってくるの，持って来なければ買ってきてあげるよ」と話を進めればいいのに，「なんで，手を挙げなかったんだ，嘘をついた」ところにポイントがいって，生徒も「もういいや」ということになりました。この例のようにポイントや問題をはき違えないところにも信頼関係の大切さがあるのでないでしょうか。「どうせ言ったって」となってしまい言わなくなります。こういうことだと思います。

加藤　ありがとうございます。田端先生にもお聞きしたいのですが，文化活動の中には心のケアにつながる部分があるというお話ですが，この思春期の生徒たちを文化活動に巻き込む，一緒にやる，これから担う力になってもらうという動きにはどんな知恵や工夫があるのでしょうか。

田端　子どもたちを巻き込むという点では，学校の先生は大変うまいです。盛り上げていくということや，直接的に自分の苦しい体験と向き合うこともカウンセリングでは重要であり，それについては先生方が話したとおりですけれど，間接的で一見関係ないことをやることによって，いわば昇華といいますか，別のことによって自分の個人的な苦しい部分を克服していくケースはあると思います。

その非常に間接的な一例が，ある被災地の学校の子どもが大変一生懸命に神楽に取り組んでいてテレビでも報道されましたけれど，そこの学校の先生曰く「私は神楽をやっていなければ不登校になっていた」と語った中学生がいたそうです。神楽をやる。その中で身体を動かして

祝祭的な身体活動をする。音楽に合わせて高揚していくわけですけれど，それと個人的な，主体的なものとは全然一見関係ないかもしれないけれど，子どもの中ではそのことによって何かを昇華できる。そしてまた，文化の中の祝祭を掘り下げていくと地方の苦しみの中でコミュニティが，不作があったり災難があったりした中でそれを乗り越えて，土地の恵みを祝っていく要素を持っていたと思いますが，そこには非常に深いつながりがあるのではないかというのが一つです。

間接性がもう少し弱い連動が見える一つとして，今私が宮城教育大学で対話による思考の深めというものに取り組んでいます。どんな疑問でもいいから子どもに疑問を出させて，その子どもが考えてみたい疑問を，セーフティという何を言っても許されるという対話形式のルールで行う，ハワイで発祥した「子どもの哲学」とか「ｐ４ｃ」と言われるものです。これはセラピーではなく，セラピューイックな，つまり精神療法ではなくて，精神療法的な差異を持っていて，みんなに自分の話していることを認められたり，出される疑問の中で「もしある時期に自分が帰ることができるとしたらいつに帰りたい？」という空想の話の中で，お父さんが亡くなる前に帰ってみたいというようなしんみりした話になっていくことがあるのですが，こういった意外なところからの治療効果というものもあると思います。

加藤　他にご質問はどうでしょう。特別支援の学校先生方はいかがですか。

鈴木　山元支援学校校長の鈴木と申します。今日はどうもありがとうございました。

本間先生の講演でリスクを抱える子どもに注意をという中で，リストアップしていくことがありました。高橋先生の取組の中にも，心とからだの健康状態に関する個人記録票の作成という話題がございました。子どもの成長を縦に見た時に，被災した子どもが成長していくものについて，しっかりと支援計画を作ることは非常に大切な視点だと考えています。

支援学校では個別の教育支援計画を作って，次に必ず引き継いでいくという取組をしているのですが，この取組が他の小中学校でどの程度進んでいるのか。そして横の部分に，行政がどのように入っていくことがこれから必要になのかという視点でご意見をいただきたいと思います。

加藤　どなたにお答えいただくか，ご指名はありますか？

鈴木　本間先生にお願いします。もう一点よろしいでしょうか。

レジリエンスという言葉がありましたが，傷ついた保護者とか被災した教員に対してのレジリエンスを高める取組について，この点も本間先生にお尋ねしたいと思います。

加藤　では本間先生，二つほどよろしくお願いいたします。

本間　特に被災地の子どもたちについては，まだまだ小学校に上がる前の段階で，家が流れた，お母さんの具合が悪かった，兄弟が亡くなった，そのような喪失体験をした子どもがたくさんいます。それを調べてリストにしていく学校は現実にあります。また中には，スクールカウンセラーの面接を受けた子どもを全部リストアップしていくという学校もあります。

つまり，我々は時が経つと忘れてしまいます。大事なことは残しておく作業が必要なります。今小中の連携で大事なのは，小学校の頃のデータを中学校にきちんとつないでいくということであり，絶対必要です。伝えられないことが切れ目を作っていきます。特に発達障害の世界ではいろいろな切れ目が多いです。小学校に上がる時の切れ目，中学校に上がる時の切れ目，そして高校，社会に出る時の切れ目があります。先ほどの教育長さんの話の中にもそのような内容が一部出てきたと思います。

我々は自閉症に関しては，自閉症の療育カルテを作って使ってもらい，切れ目のない情報を確保することを随分推奨して取り組んできました。ですから，そのような取組が少しづつ始まっているところもありますし，もっともっといろいろな学校で広がればいいと思っていました。

それからレジリエンスのことですが，本当は先ほどの講演の中でレジリエンスのことをお話しようと思ったのですが，時間がなくてできませんでした。学校の先生たちに取り組んでほし

い，あるいは自分のレジリエンスを高める方法は，一番大事なことは笑うということです。笑える場が学校の日常生活の中にあれば，笑うことがレジリエンスをかなり高めます。そしてもう一つは，子どもからのフィードバックです。私たちは仕事をする上で，どこかで褒美がほしいのです。学校の先生にとっての一番の褒美は生徒が成長することです。生徒が先生に対しての良い思いをきちんと伝えてくれた時が，先生にとって一番良い褒美になるのです。そういう点では，生徒の気持ちそのものを上手く引き出すことで，先生のレジリエンスはもっともっと高まる。生徒の有用感ではなく先生の有用感を高めていく工夫が絶対に必要になります。その有用感が子どもからのフィードバックです。その点が大事であると思っています。

そして，先ほども言いましたが，この度の大震災は，学校の先生方がすごい活躍をしました。亡くなった子どもはほとんど学校外だった。学校の中にいた子どもたちは先生たちが必死になって守りました。そのことを生徒が知っています。先生方は振り返ってみるとそのことに気づかれると思う。ですから震災の３月１１日のことを時々振り返り，自分たちが役立ったことについて振り返りをしてみるのも自分のレジリエンスを高めることになると思います。

鈴木　ありがとうございました。

加藤　そろそろ終了の時間に近づいてまいりました。最後に，僭越ではございますが私の方からまとめて参りたいと思います。

学校の教職員は震災の直後から，学校と子どもを守り，地域に開き，支援に追われてこられました。一日も早く子どもたちのために普通の授業がしたい，日常に戻したいという思いも，先の見えない非日常的な事態の中で，なかなか叶わない時期がたくさんありました。震災１年後位に，ある先生が「町がすっかりなくなり，進学や就職も決まらない中，子どもたちにどうやって将来の目標を持たせてあげればよいのか」，とおっしゃっていたのを思い出します。

大人には仕事が必要なように，子どもには遊び，学び，活動が必要なのだと思います。震災後多くの不自由な状況がありましたし，それは今も続いているという学校が確かに存在します。ただ，教育の場としての建物，設備が奪われても，子どもたちにとっては先生のいる場所はまちがいなく学校であり，養護教諭のいる場所は保健室でした。

震災後，教育は人と人との関係なのだという非常に素朴で，でも力強い事実を感じる光景を幾度も目にして参りました。今年の春，私は震災で親を亡くして，現在は大学生や専門学校生になっている方々と話をしておりました。当時は中高生だった方々なんですが，ある学生がこんなことを言いました。「僕はずっとずっとずっと周りの人たちから支えられている立場なんです。だから僕は教師になって還元したいと思っている。」また先週，石巻の合同庁舎に出向いた時に，この春に入職した石巻出身の保健師が働いておりました。また，その日は福島と石巻出身の看護学生が看護実習を行っておりました。震災から４年が経つということは，こういうことが起こり始める時期だということでもあります。こうしたことを，佐藤先生は「恩返し」，「生徒の成長がご褒美」という言葉でお話になりました。同様のことは田端先生もおっしゃっていたとおりです。

もちろん震災の体験は決してひとくくりにできない固有の体験であり，心の復興の目標やペースも一概にまとめてしまうことができません。子どもは発達しながら心の回復を遂げていくこともありますが，今日，パネリストの話題の中に幾度も出てきましたが，発達しながらようやくその問題を表出できるようになる，ということもあるのだということがわかりました。つまり，被災体験の表出には時差がある，個人差がある，ということに目を向けてあげたいものだと思います。

またそうは言っても，時間の経過とともに各々の被災は表からは見えにくくなるという話も各先生方から出てきました。見えにくくなるだけではなく，私たちが触れにくくもなっていきます。私たちはそのことを極端に触れないでもなく，極端に明らかにするでもなく，その子どもの背後に対するゆるやかな想像力を持って見守り，関わり，日常を繰り返していくことが必要なのかもしれません。

このことについて，実は違う言葉ではありますが，みなさんが触れていらっしゃいました。本間先生は「この子どもにとっての３月１１日とはどんなだったかをちょっと考えてみる」と

おっしゃいました。田端先生は，「さりげないケア」という言葉や，先ほども補足していただきましたが「学習活動や文化活動には，秘められたケア機能があることに気づく」という言葉でおっしゃいました。また，髙橋先生は「震災の関連があるのではないかと考えてあげる」という言葉でおっしゃいましたし，佐藤先生は「わかろうとする気持ちが重要」とおっしゃったように思います。いずれも，ゆるやかな想像力を持って私たちに見えにくい，触れにくい生徒たちに，それでもなお関わっていくことの大事さを指摘なさっていたと思いました。その意味で，被災地の生徒にかかわる際に，自分自身が直接的な震災体験をもっていないことを案じている先生方にとっても，このゆるやかな想像力を持つことで，実は先生方がなくてはならない力になって，宮城県の子どもたちを支えていくことができるのだと今日確信をいたしました。

震災３年目の時，ある中学校の養護教諭がこんなことを教えてくれました。「この頃，保健室の“ちょこっと利用”が増えているんです。何があるわけでもないのに，身長や体重を量りにくるんです。爪切りを使う。湿布やバンドエイドを貼ってもらいたがる。何となく私の後をついてくる。とってもわかりづらいが，じっと聞いていると『実は…』という話がある。だからその気持ちで見ようとしないと見えないんです。」ゆるやかな想像力というのはそういうことなのかなと思うのです。

そうした繊細な配慮に留意しながらも，多くの子どもたちは，広い意味では，発達しながら自分を作っていく存在であるということも，今日ここで学ばせていただきました。社会の影響を受けながら，出会った出来事を咀嚼しながら，周りの大人の背中を見ながら，子どもたちは育っていくのだと思います。

「安心できる大人」という言葉で髙橋先生はおっしゃいました。私たちは，一人だけの背中では少し心細いのですけれども，ここにいるこれだけの数の背中を合わせて子どもたちに見せていきたいものだと思います。その意味でどの先生もがお触れになった，やはり「連携」という言葉です。学校と医療の連携，学校と心理の連携，学校と福祉の連携，学校と地域の連携。それは子どもたちのためでもあり，また教職員自身のセルフケアのためでもある。そして「そのセルフケアこそがモデルになっていますよ」と，基調講演で本間先生はおっしゃっています。私たち自身の連携が必要なのだと思います。

震災は，専門家も非専門家も，事態の大きさに皆立ち上がり，自分にできることを探して動いた。そういう「横の連携」の重要さを教えてくれたことでもありました。これは転居や転校という物理的な子どもたちの移動に伴っても，学校を超えて必要になることだと思います。

そしてもう一つご指摘いただいた連携には，学校間にまたがる申し送りの大切さという意味で，「縦の連携」ということがありました。これは最後に特別支援の先生からのお言葉にもありました。時間が経ち，子どもたちの発達に伴って受け継がれていく我々の縦の連携，学校はこれを震災の記録という具体的な形で努力していくことができるし，またそれが求められているのだと思います。この縦・横の連携を駆使しながら，立体的に子どもたちを守り，導く。そんな大人となれるように，本日いただいた多くの示唆を心に留めながら，ゆるやかな想像力を持って，またひとつひとつそれぞれの現場で進んでいきたいと思います。

パネリストの先生方，本日は大変ありがとうございました。

非常にたくさんの示唆がありまして，この場で実らせるには時間が足りなかったかもしれません。これからそれぞれの現場に持ち帰る種として，おそらくは時間をかけてそれぞれの学校で実らせていかれることと思います。

本日は，遠くからお集まりいただいた先生方もたくさんいらっしゃいます。どうぞ気をつけてお帰りください。そして，教職員のセルフケアを大事にしながら，ぜひ皆さんを中心に学校を守っていく力となりますように，それを祈りといたしまして今日は終わりにいたしたいと思います。

ありがとうございました。

平成２７年度　東日本大震災心の復興事業

こころの復興フォーラム in みやぎ　～子どもたちのみらいのために～参加者アンケート
《　平成２７年８月１１日（火）　東京エレクトロンホール宮城　》

本日は大変お疲れ様でした。本日のフォーラムに参加して管理職として心がけたいこと，学校経営に生かせるもの，所属に伝講したいこと，気づいたこと，印象に残ったこと，などがありましたらご記入ください。

職　名	

該当所属を○で囲んでください。　⇒　小学校　／　中学校　／　高等学校　／　支援学校
その他（　　）

１　本日のフォーラム全体について（該当する箇所に○をつけて下さい）

ア　参考になる内容がとても多かった　　イ　参考になる内容が比較的多かった　　ウ　参考になる内容が少ししかなかった　　エ　参考になる内容がほとんどなかった

２　基調講演「大震災から５年目の子どもたち」について

□にチェックを入れてご意見ご感想をご記入下さい

□管理職として心がけたいこと　□学校経営に生かせるもの所属に伝講したいこと　□その他

３　パネルディスカッションについて

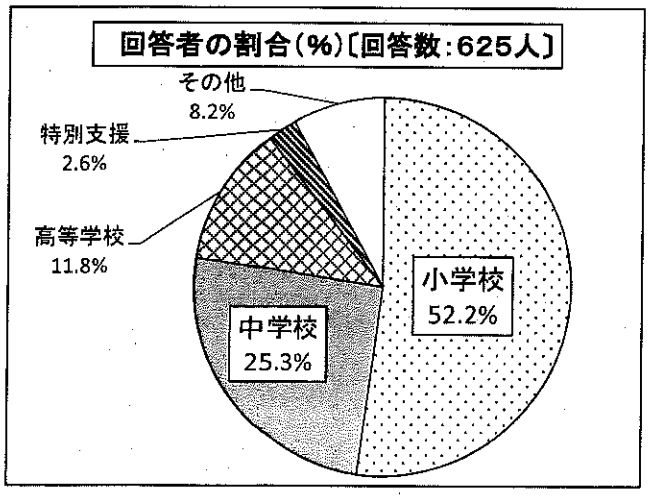
□にチェックを入れてご意見ご感想をご記入下さい

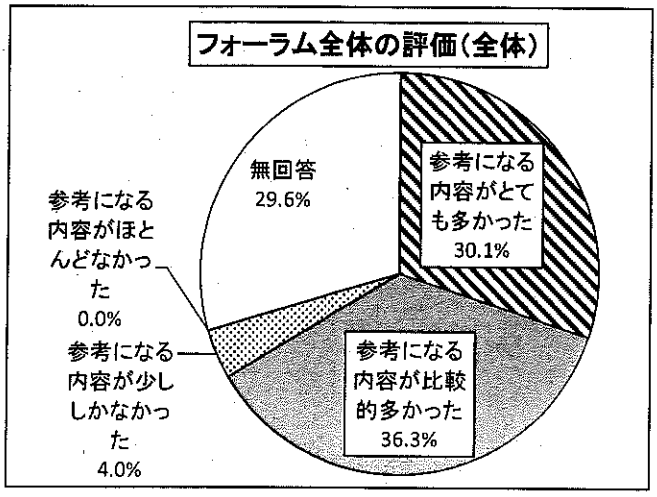
□管理職として心がけたいこと　□学校経営に生かせるもの所属に伝講したいこと　□その他

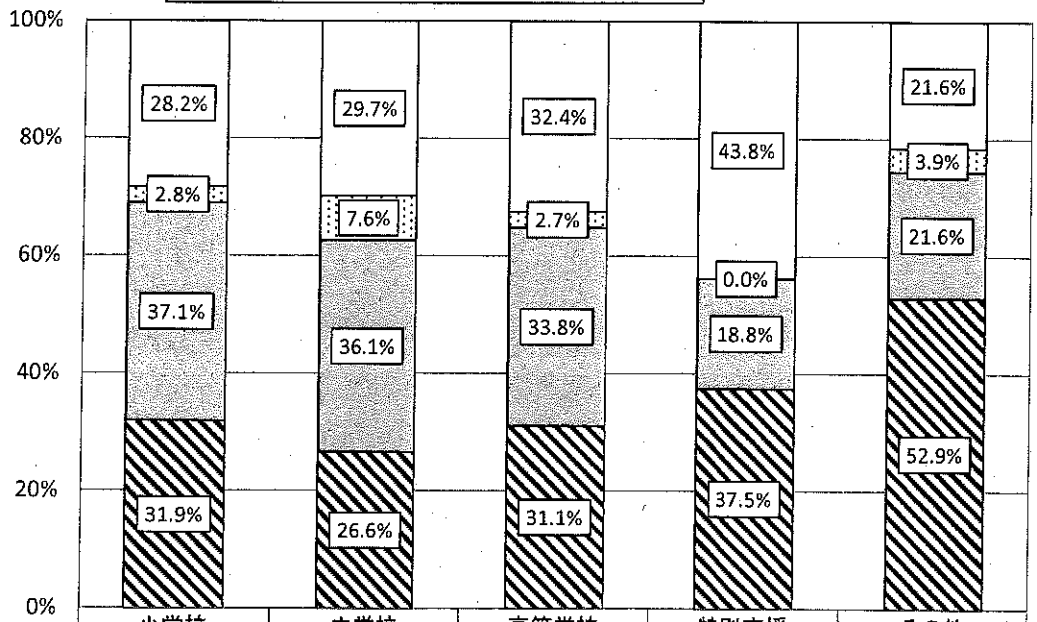
４　本日のフォーラム全般について，ご感想等がありましたら，お書きください。

ご協力ありがとうございました。

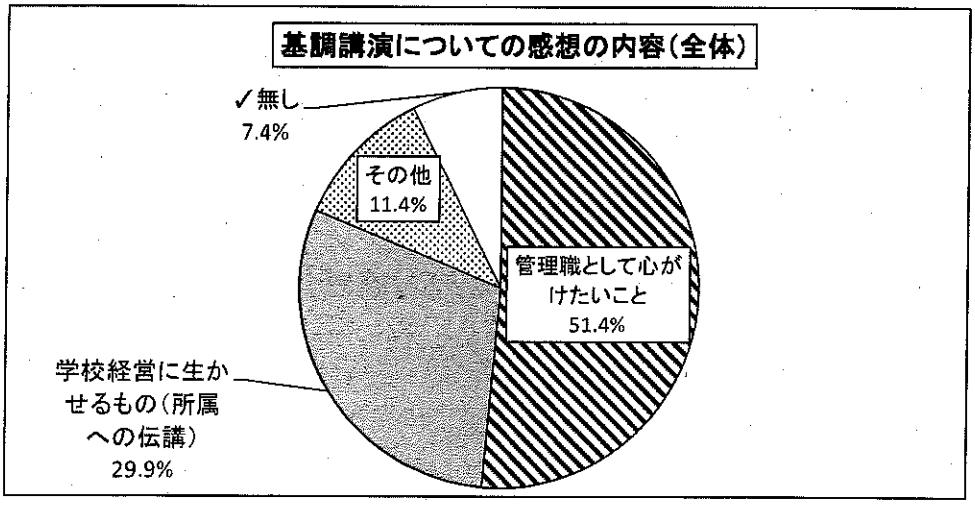
こころの復興フォーラム　参加者アンケート集計結果



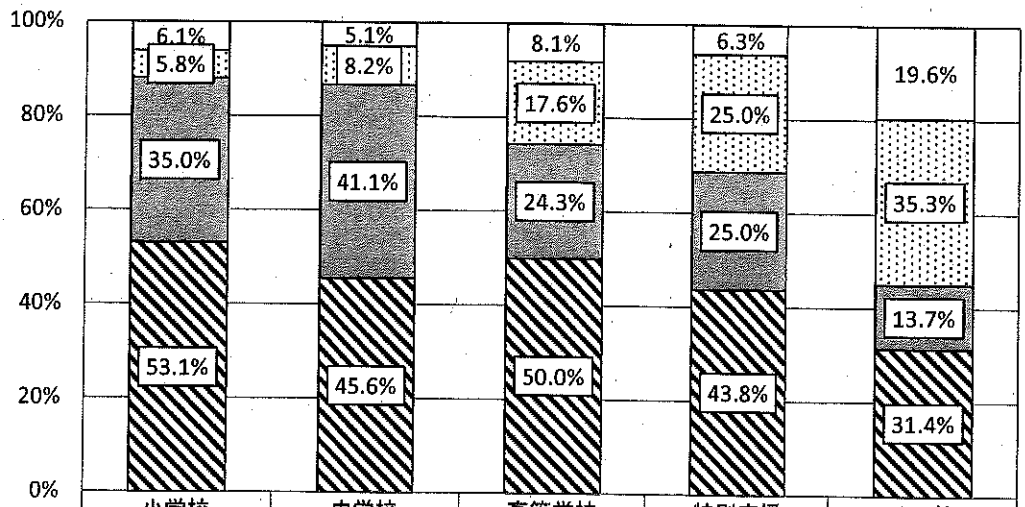




	小学校	中学校	高等学校	特別支援	その他
□無回答	28.2%	29.7%	32.4%	43.8%	21.6%
■参考になる内容がほとんどなかった	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
◫参考になる内容が少ししかなかった	2.8%	7.6%	2.7%	0.0%	3.9%
▨参考になる内容が比較的多かった	37.1%	36.1%	33.8%	18.8%	21.6%
▧参考になる内容がとても多かった	31.9%	26.6%	31.1%	37.5%	52.9%

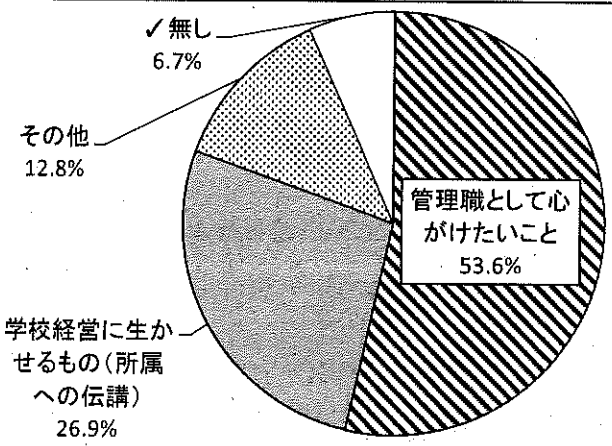


基調講演についての感想の内容（回答者別）

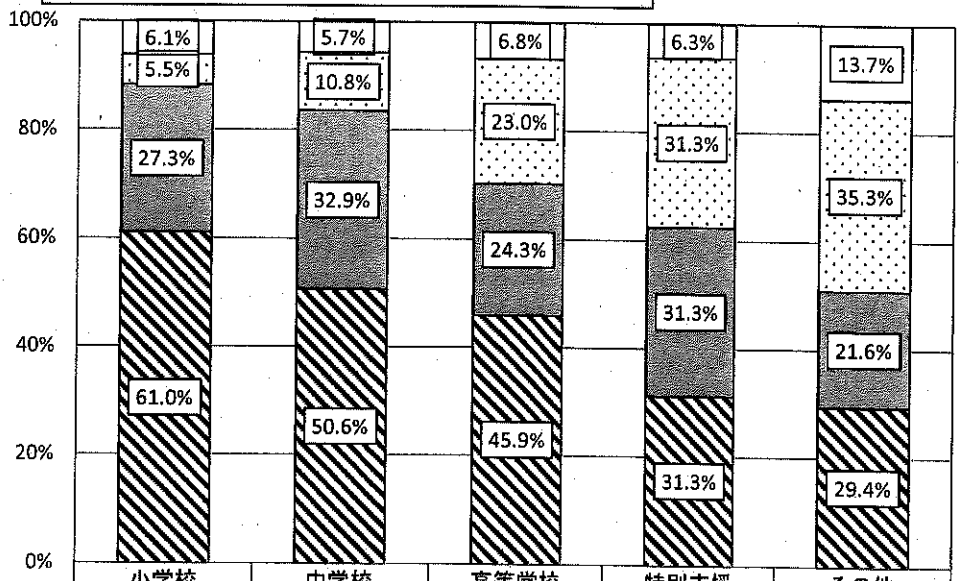


	小学校	中学校	高等学校	特別支援	その他
□✓無し	6.1%	5.1%	8.1%	6.3%	19.6%
□その他	5.8%	8.2%	17.6%	25.0%	35.3%
▨学校経営に生かせるもの（所属への伝講）	35.0%	41.1%	24.3%	25.0%	13.7%
▧管理職として心がけたいこと	53.1%	45.6%	50.0%	43.8%	31.4%

パネルディスカッションについての感想の内容（全体）



パネルディスカッションについての感想（回答者別）



	小学校	中学校	高等学校	特別支援	その他
□✓無し	6.1%	5.7%	6.8%	6.3%	13.7%
□その他	5.5%	10.8%	23.0%	31.3%	35.3%
▨学校経営に生かせるもの（所属への伝講）	27.3%	32.9%	24.3%	31.3%	21.6%
▧管理職として心がけたいこと	61.0%	50.6%	45.9%	31.3%	29.4%

「こころの復興フォーラム in みやぎ～子どもたちの未来のために～」
参加者の意見・感想等

○期　日　　平成２７年８月１１日（火）　午後１時３０分から午後４時３０分
○会　場　　東京エレクトロンホール宮城
○アンケート回答数　（総数）６２５人
（内訳）小学校　３２６人，中学校　１５８人，高等学校　７４人
特別支援学校　１６人，その他　５１人

１　基調講演「大震災から５年目の子どもたち」について
講師：宮城県保健福祉部次長兼子ども総合センター所長　　本間　博彰　氏

○小学校

・子供たちの様子を見ていると，日常を取り戻しつつあるが，家庭では地震の度に泣き叫ぶ子，震災で亡くなった幼稚園の先生の姿を思い出し，口にする子など，子供たちが内に抱えているものの重さを感じることはあります。**講演の中での子供のレジリエンスを高める取り組みを意識**すると共に,全職員でも確認して２学期をスタートしたいと思います。

・子供たちのために日々懸命に取り組む教師の姿が子供の心のケアにつながっているというお話は，学校として誇らしく，報われる思いがしました。だからこそ，**現場の教師のメンタルヘルスにもしっかり気を配っていきたい**と思いました。

・**学校外の子供の様子を調査などで把握し，必要な支援を行っていくことは，これからも大切である**ことが再確認できました。被災の程度ならず，このことは管理職として心がけてきたいと強く思いました。また，**外部機関との連携も視野に入れていきたい。**

・これまでかくれていた問題に対してもきちんと対応していくことの大切さについて大変参考になった。**一人一人の児童にとって学校がもっと安心できる場所になるよう，職員とともに考えていきたい。**

・**転出先で不適応を起こしそうな児童への配慮（転入受入側として），引継ぎの徹底に留意していきたい。新入生についても同様（幼児期のトラウマについて）所属職員にも該当児童のリストアップと必要に応じた関係機関との連携について指示・助言に努めていく。**レジリエンスを向上させる取組について，もう少し詳しく伺いたかった。被災児童にとっての学校という場の重要性を再確認した。**心の拠り処としての学校**でありたい（親にも子にも）。**職員のメンタルヘルスにも留意**していきたい（震災との関係の有無にかかわらず）。

・**子供自身が持つ問題への対応力（その資質）をどう養っていくかが，学校としての大きな課題である**と感じている。また，子供が自身の不安や悩みを進んで相談できるような体制をどのように作るのかがもう一つの課題であると感じた。**ＳＣや相談員の活用**も一つの手立てである。

・教師も一人の人間。だから知らず知らずのうちに，心の傷を深めることになる。**自分のケアができることこそ，子供にとって最高のモデルであるという視点を持ち続けていきたい**と思った。

・**子供の問題の背景をしっかり理解し，対応することが大事**である。震災に限らず，子供の問題には，生育歴，家庭環境など内部外部の要因があり，複雑である。学校の立場，立ち位置をしっかり確認しながら，学校運営を進めたい。

・本校においてもここ数年，発達障害を疑って病院や児童相談所，スクールカウンセラーに相談する保護者が増えている。東日本大震災で大きな被害のあった地域ではなかったので，大震災というものを結び付けて考えることはなかったが，本日の基調講演を受けて，**「大震災から５年目の子どもたち」をキーワードに本校の子どもたちを見ていきたい**と思った。

・本校では大震災による大きな被害はなく，震災以前の落ち着きを取り戻しているが，職員の心の中まで見えないところがある。中にはストレスをためている職員がいるかもしれない。**風通しのよい職場を目指し，職員とよくコミュニケーションを取っていきたい。**

・トラウマを抱える児童の心の表れを十分に把握し，ケアを継続されるためには，支援体制がいかに重要かということを強く思った。**子どもの背景にある保護者や家庭環境を理解し**

た上で学校として取り組むことができるよう学校として知識や対応技術を高めていかなければいけないと思った。

・「子どものレジリエンスを高める取組」に関連して，日常生活の中にはレジリエンスを育てる要素がたくさん詰まっているという講師のお話に大いに勇気づけられた。**子どもたちのレジリエンスを高めていきたい。**

・様々な資料を基にお話いただいた。被災地とそうでない地域との温度差が拡がる中，その両地域に勤務した経験をどのようにいかしていけばよいか試行錯誤している。本間先生の**「レジリエンス」の意味，また震災で得た対応力を様々な学校問題に生かす事を学校経営の視点に組み込んでいきたい**と思っている。

・**水面下にあって見えない問題について，よく見取るようにしていかなければならない**と思いました。丁寧に子供たちを見取るようにしていきたいと思います。
・**発達障害に類似した子供達が震災後に多く見られるようになった**ことは，日々の子供達の指導をする際に，先生方にも伝えていきたい内容であった。また震災の影響が出るのは，３～５年からと想像していたが，もう少し遅れて影響がでることも所属校の先生方に伝えていきたい。

・教員自身の思いの中で「早く震災を忘れたい」というものがあり，それが目をくもらせてしまうかもしれないという考えは今までになかった。**自分の中の疲れに目を向けたい。**現状として，**自分の心をもう一度みつめてみたい**と思った。同様に職員にも知らせたい。

・**いじめや不登校問題も「災害」のひとつとしてとらえるという新しい見方，考え方**について，とてもよく納得ができた。**その解決やそれに備えるために大人（特に，学校では教師自身）が，レジリエンスを高める必要がある**というお話しは，ぜひ２学期の始まりにあたり所属校の職員に伝え，これまで以上に職員の結束を固め，学校経営に当たりたい。

・本間先生ご指摘の内容は，被災地である本校にとって随分当てはまることが多かった。**子どもの荒れや不安定は確実に年々増えている。「問題行動が多いことが，学校運営と関わりがない。」**という本間先生の言葉は頷けるものであり，後押しをしていただいた思いである。

・**教師自身に「早く震災を忘れたい」という思いがあり，それが子どもたちを見る目を曇らせてしまうかもしれない**という考えは今までなかった。自分の心をもう一度見つめるとともに，このことを職員にも知らせたい。

・「家庭の教育力の低下」という点が気になった。子どものケアは大人のケアから考えねばなりません。**学校が保護者にとっても心のケアにつながるコミュニティになるように心がけたい**と考えます。

・問題が発生した場合，震災との関連性を考えてみるという新たな視点を与えていただいた。また，**子どもの心の声に耳を傾ける必要性を改めて感じた。**

・阪神大震災では，メンタルヘルスを要するこのピークは３年後であったとのことを受け，あの日以来，阪神のことを参考に，手遅れにならないように早め早めのケアを心掛けてきました。が，気づけば「ハイリスクの子だった･･･」という事例もありました。**「レジリエンスを高める取り組み」はこれからも教職員と共に行っていきたい**と思いました。

・学校で見える子供の姿ばかりでなく，**家庭・地域に戻ってから見せる姿にも気を配ることが必要**と思った。また，**教員も知らず知らず疲れがたまっていることや親の養育機能の低下を反映する問題がある**ことは確かに気になっていた点の一つであった。

・**震災から今日に至るまで子供達に先生方は必死のケアを行ってきた。その姿を子供達が見てきたからこそ，他国の震災後の状況と比べてＰＴＳＤ等の問題が少ない。**この言葉に大変勇気づけられた。

・**子供の実態を詳しく正確に把握した上で，目をかけ，声をかけ，寄り添った対応を早い段階から実施していくしかない**のだろう。カウンセラー等専門性の高い人材を配置し，教職員を手助けさせる，一刻も早い復興により生活環境を整える等，国（政府）や県の対応を強く求める。

○中学校

・「自分のケアができる大人の姿が子どものモデルになる」という言葉に考えさせられた。外の情報を学校経営に生かすということがその通りだと感じた。

・目の前の子ども達が４年５ヶ月前にはどこでどのような生活を送っていたのか，どのような体験をしたのかを再確認し，共通理解しておく必要があることをあらためて認識した。このことは子ども達に対してだけではなく，教職員に対しても同様であると感じた。

・「災害は見過ごしていた課題を顕在化させあぶりだす」という視点はとても参考になった。災害がなければ見過ごしていた課題であり，私たちはこの顕在化した課題から目を背けることなく，今後に備えて対策を構築し，一日も早く復興できるよう，支援や心のケアをしていかなければならないと思った。

・子どもたちのこれから先の主要な問題，特に被災時，乳幼児だった子どもが入学してくることに対してきちんと対応できるよう，リストアップしたり加配教員の必要性を訴えたり，保護者や地域からの理解を得られるようにしていきたい。

・私は震災当時沿岸部の学校に勤務していたが，現在は内陸部の学校にいる。あまりにも温度差があることに驚いている。風化させずに今後の安全教育を含め，学校経営に生かせるよう職員に伝えていくことが使命と感じる。

・子どもの心のケアはもちろんだが，それ以上に教員の心のケア（メンタルヘルス）に目を向け，活力ある学校経営に努めていきたい。

・自らの心のケアをしていなかったこと，ため込んでいたことを反省した。

・子どものレジリエンスを高める取組みを，生きる力をはぐくむ中でどのように位置づけていかなければいけないのかを考えさせられた。また，今後も自然災害を始めとする災害が発生する可能性がある中で，災害後の対症療法のみではなく，事前の指導をしていく工夫も必要であると思う。今後の防災教育の重要性を再確認できた。

・どの生徒にも健全育成，自己実現に向け様々な配慮をしていかなければならない。被災した生徒には特に必要であるのは当然である。保護者もそれを願っている。しかし，被災生徒が問題行動を起こしたことについて，社会のルールを理解させて指導していくが，保護者はその問題行動以前に被災している事への配慮が必要だ，配慮不足だと声高に言うことが多い。配慮は配慮として，「被災した子どもなんだから」と逃げ込むことなく，しっかりぶれないで指導していくよう職員に指導している。

・モデリングとしての教師，保護者の生き方。

・県内でも温度差があるので，子どもたちの現状を教職員に伝え，心の問題を抱えている子どもたちや災害時の対応をこれからも継続して考えていきたい。

・問題事例を発見できることは逆に，それだけ細やかな感受性をもって子どもたちを見る先生が多いということにもつながっている。

・被災後５ヶ月間，学校で避難所対応に当たりました。自校の生徒はもとより，避難所の幼児，小学生～高校生と向き合ってきました。転勤後も被災校で仮設校舎での生活，仮設から通ってくる子どもたちと向き合ってきました。その実体験から言えることは，心をケアすることよりもいかに現在，そして未来に意識を向けさせることが，乗り越える唯一の方法だということです。教員も同じです。過去を振り返っている大人が子どもの傷を大きくしています。

○高等学校

・直接に震災の影響を受けていない生徒の中でも隠れた被災者がいることが強調されました。この事実を再確認することができ，子どもたちへの間接的な影響の大きさを学校現場で職員と共有していきたいと思った。第一義に子どもたちの将来を考えながら，学校経営へ臨んでいきたい。

・**生徒の問題行動を震災の後遺症，影響と結びつけて考える視点が大切**だと思いました。子どもたちの**心の傷，家庭環境なども含めて震災の影響と絡めて考えていかないと問題の解決に結びつかない**と思いました。震災を体験した子どもが高校を卒業する最後の年度まで，あと約１０年はかかることを考えると，６・３・３の今後１０年のスパンでケアを考える必要があると改めて考えさせられました。

・**表面に現れた現象，行動の背景にあるものを深く考察していくことが，改めて大切だと感じた**。常に新しい視点を身に付けていけるよう研修等に努めていきたい。
・生徒の心のケアの大前提として，**教職員の心の安定が必要である**というお話に感銘を受けました。まず安定した心を保つために管理職としてできることをやっていきたいと思います。

・**子どもの行動や外見では見えにくい問題（無気力，ひきこもり等）や家庭・地域で起こる問題等，学校内外で生徒がどのような言動をしているのか観察，情報交換，指導，相談を細やかに行っていく必要**がある。このことの重要性を再認識する機会になったため，今後，心がけていきたい。

・これからも震災から受けた心の傷を癒やすことは継続していかなければならないと思っていました。これまで直接関わってきた先生方の御努力の結果，多くの子どもたちを救ってきたと感じました。本間先生は最後に，これからは先生方のメンタルヘルスが重要であるとの話があり，**職場の先生方に対する思いをしっかりと持って対応していきたい**と思いました。

・４年５ヶ月という時間がこれまで出現しにくい問題をより大きな問題となって出現させる状況となっている。まだまだ**これから大人・子どもともにケアが必要になることを再認識した。本当に必要なケアを的確にしていきたい**と思った。まずは表に出させることが重要だと感じた。

・**学校では見えないところで起こっていることに注意を向けることは，昨今の生徒の様子や保護者との対応の中で必要**だと感じていた事です。**保護者の仕事の状況，経済的な事情が生徒の就学に大きく影響している例が多く見られるようになった**と実感しています。行政や福祉の方々との連携を模索しています。

・ピンチをチャンスに変えるという一言では片付けられないほどの大きな出来事でしたが，**生きづらい現代社会において，顕在化した課題を解決し逞しく生きていけるレジリエンスを高められるよう意識して学校経営に当たっていこう**と強く思いました。

・「阪神」と比べ「東日本」の復興の遅れが，子どもたちの心の問題の発生を遅らせる可能性があり，**今後高校に入学してくる生徒の中にも心のケアを必要とする生徒が生じることを共有していかなければならない**。ただし，中学校でも「東日本」発生時の動向を十分に把握できない状況となっており**幼（保）・小・中・高の情報共有の在り方が課題**である。
・**「見落とされがちな子どもの問題」は学校現場として重要な問題**である。学校の中ではうまくやっている子どもでも，学校の外で家庭や地域の問題でストレスや心の傷を抱えていることもある。**学校は外にも目を向けていかなければならない**。

・時の経過とともに温度差や風化が出てきているが，**改めて震災の被害と教訓を心に刻み，伝えていかなければならない**と強く感じた。また，**メンタル面で学校の果たす役割，学校のサポートが大きい**ということを確認できた。

・本校では直接的な被災はほとんどないが，今年度に入り生徒指導・問題行動が目立っている。**大きな震災を経験したことや親が自分の親を亡くしたり，実家が流出したりしたこと，様々な報道による影響が出ているのかもしれない**。学校は生徒を支援する教育機関であることを改めて自覚し，職員に伝講してきめ細かい対応をして参りたい。

・**沿岸部の被災地にある高校**です。表だった問題は発生していませんが，**心の傷を負った生徒がかなり見られます。子どものレジリエンスを高めることができるよう**に引き続き努力していきたいと考えております。また，被災している教員もかなりおり，**教員のケアと同時に子どもたちのモデルとなり得る大人の姿を見せることができるよう**に学校一丸となって取り組みたいと考えております。

・**震災が与えた生徒達への影響が様々な形で広がっている**ことを改めて実感させられた。**生徒の言動を表面的に捉えるのではなく，慎重にあらゆる観点から丁寧に観察し，一人一人をしっかり把握することが必要である**と実感した。そのための具体の方法を検討し，それを実施していきたい。

・被災体験をやっと話せるように生徒はなってきた。**様々な復興関連行事に参加させて，地域興しで前を向いて活動させたい**。片親になったり，生活困難者が継続中である。**生徒一人一人の事情の把握が必要**である。

・**学校の災害に対する対応力**を高める。そのためには**管理職が自らのケアを行うモデルとなること，そして外部（地域や関係機関）との連携をしっかりと確立していくことが大切**であることを学ぶことができ今後に生かしていきたい。

○特別支援学校

・勤務校が内陸部であったので，被災経験としては比較的軽微であったが，５年経過する現時点で**震災の記憶を風化させない**ことが，被災した人々へのためにも大切なのだと身にしみて感じたところです。改めて**震災への対応の記憶を呼び覚ますよう心がけたい**と思いました。

・大震災５年目を迎え，先生方の入れ替わりも多くなり，震災の経験については様々である。**学校としての震災対応とともに，先生方の震災時の状況を知ることでケアに努めていかなければならない**と感じている。

・今；**職員のレジリエンスを高めるのにどうすべき**か考えているところですが，その点で多くの示唆をいただいたと思います。具体的には書けませんが，やるべき方向性が見えてきました。

・風化は私たちがもう忘れてしまいたいという気持ちももたらしているのだと感じた。**阪神より確実に復興は遅れている。心のケアもこれからが大変なのだと肝に銘じていきたい。**

・レジリエンスの高め方がとても参考になった。**日常生活が当たり前に行えるよう子どもたちを含め，教員についてもしっかり向き合っていきたい**と思いました。

・本校にも石巻地域から異動してきた職員がおります。トラウマを抱えており心の安定を第一と考えております。**自分のケアをしっかりして子どもたちに適切に指導できるよう管理職として心がけていきたい**と思います。

・本校では震災による直接の被害を受けた児童生徒や保護者は多くはないが，その現れ方が様々な形で起こり得ること，**各種災害は大きく増加，トレンド化し，その対応に震災被害の対応の仕方が有効である**ことを感じた。

・**子どもの問題行動が震災に起因するストレスであるとの視点は大切である**と思う。同時に**ストレスを言語化することが軽減のために必要であること，そのための言語活動の充実が大切である**ことを職員で共有したい。

・震災後，徐々に現れてきている**心の問題への対処，家庭内におけるＤＶの問題，児童生徒や家族が抱えるトラウマについて計り知れないものがある。家庭内の状況については可能な限り，より踏み込んだアセスメントが必要**と感じた。

○その他

・行政としても今後も学校や関係機関と連携していく必要性を感じた。

・児童，生徒の変化に気づく目，感性を養いたい。

・**新入生の被災状況を把握しきれていない部分があった**ので対策を考えたい。

・学校外の問題が大きい中で**どう学校内を楽しい場にしていくか**力を入れていきたい。

・**自分自身が心身健康であることの重要性，それが子どもに与える影響**がよくわかった。

2　パネルディスカッション「子どもたちの未来のために」について

パネリスト　東北大学大学院教授　加藤　道代　氏（コーディネーター）
子ども総合センター所長　本間　博彰　氏
宮城教育大学教授　田端　健人　氏
宮城県臨床心理士会理事　高橋　総子　氏
気仙沼市立条南中学校長　佐藤　正幸　氏

○小学校

・それぞれ専門的な立場から短い時間ではあれ，貴重なお話を伺うことができ，たいへんよい研修の機会になりました。特に宮教大の田端先生の**「文化的ケア」**というお話に力づけられた思いです。文化は，土地のアグリカルチャーと不可分であり，土地とそこに住まう人々を**「慈しみケアする」**ことを意味したというお話をよく咀嚼し，二学期以降の学校行事を充実させたい。

・内陸部にある学校で沿岸部のような大きな被害は出なかった。しかし，他校の校長の話から，沿岸部とつながっている子供，家族は多いことが分かった。仙台市で行っているような**カルテを活用し，子供たちを振り返ってみたい。**

・スクールカウンセラーの活用が不十分なことに気づかされた。**子供のことは先生方が，スクールカウンセラーは先生方が子供にどのように接すると良いかのコンサルテーション，これが本校において重要**である。

・すべてを学校で抱え込まないと言われているが，学校に求められる役割の大きさと重さは増大する一方である。**授業作りを中心に働くべき教師は，いじめ，不登校への対応，保護者対応，防災拠点としての仕事，保護者の生活の支援まで考えている状況がある。“チーム学校”は，もはや教師だけでは学校として広がった機能を果たせないことの証である。職員の健康を守ることを第一に，関係諸機関との連携を生かし，問題への対応を考えていきたい。**

・現場の校長先生のお話は，さすがに心にずっしりくるものがありました。**その人の気持ちをわからないが，わかろうとする気持ちが大切である。**この言葉を管理職の立場として心がけていきたいと改めて思いました。

・**笑いが学校にあるか。**笑いは心の余裕。子供の心のケア，教員のケアに最大の効果があるような気がする。**話を聴き，話をして，自己有用感を持てるようにさせたい。**

・被災地の学校であっても，職員組織の改変等により，震災が風化しつつあることが問題であるとあらためて感じることができた。**震災が風化し，忘れ去られることが被災者にとって最も心の傷をさらに深めることにつながるという視点で，児童個々の震災からの歴史の掘り起こしに努めたい**と考える。また，日々の教育活動の充実こそが学校の復興につながることを２学期の始まりに当たり，私自身，心にしっかりととどめておきたい。

・**震災で傷ついた大人（保護者）を救う役割を学校が担っている**ことを自覚する。だからこそ，学校組織をあげて対応することと，**地域や他機関と連携して，学校力を高めておく**ことを心掛けたい。

・内陸部においては，ともすると震災復興についての意識が薄いものになりがちである。校長として今後どのような学校に赴任しようとも，**心の復興を忘れず児童生徒はもちろんのこと，保護者，そして職員の心のケアに努めていきたい。**

・**子どもの問題行動があったとき，その子どもの家庭や家族の状況も把握して実態を見つめて支援していきたい。**また，**スクールカウンセラーを積極的に活用することや関係機関等と連携することも重視**していきたい。

・パネリストの話を伺い，**震災の影響が今後も継続するでであろうことや子どもたちの問題行動の裏にある原因をしっかりと見極めることが大切であること，そして，教職員のケアが必要であること等，管理職として配慮していかなければならないことを痛感**した。

・一人一人のパネリストの方の提言が本当に参考になりました。**心の復興はまさにこれから。是非教職員に伝えたい。**

・被災校の児童･職員の文化的ケアの有為性について強い共感を覚えた。震災のプラス面をあえて挙げるとすれば，**地域・保護者の学校への信頼感が深まり，職員を支えるエネルギーの一つとなった**ことであると思われる。**職員の使命感と自己有用感は地域・保護者・児童からのそのようなエネルギーで支えられており，それが教職員のケア・文化的ケアとなっている**と実感した時期がある。

・**当時の子供の状況を知るスクリーニングの必要性**を強く感じ，今年度からできるところから実践を始めようと考えている。復興公営住宅も学区内にあるところから，**子供のここまでのストーリーが分かるようにしておくことが指導支援には重要である**と思った。

・高橋先生の**子供の心をケアするときは，子供の将来を見据え，どう支援していくか具体な策を立て，体制を作って対応していくことが大切であり，子供自身が目標を設定することを支援していくこと**，というお話をこれから子供の心のケア，生徒指導の基盤としたいと思います。

・学校が持つ力を再認識した。この力を効果的に生かせるようにビジョンをもって体制づくりをしていく。**ミドルリーダーを育てることが大切**だと感じたので，各担当のリーダーを育成していく。いろんなつながりづくりに尽力していく。

・子供の行動が震災体験に結び付けて理解されない場合があるという指摘より，**カウンセリングの主役が教師であるという自覚を持たせ，学校全体で一つとなり組織で動けるようにしていきたい。**

・**校長が高い意識を持ち続ける**こと。**素早く対応する**ことを念頭に，今後も学校経営に当たっていきたい。

・高橋先生の「心とからだの健康状態に関する個人票」の作成のお話に励まされました。現任校でも前任校でも**「あの日（3.11）をどこで，どのように過ごして，今，この学校にいるのか」のアンケートを実施し，記録としてまとめ職員で共有**しています。これに，**「ていねいな聞き取り」を加筆する**など，より有用なものとしていく必要性を感じました。

・「子供の健康調査票」については，現任校でも必要と思われます。山間地であり，被災はしていませんが，**被災地からの転入生**が時々います。「震災の風化」という言葉がよく言われますが，**転入してきた児童が，どのようなストーリーを持っているかに，私達はもっと目を向ける**べきだと思います。また，どのような指導，支援を続けてきたかというストーリーと合わせて，一人一人に向き合っていきたいと考えました。

・パネルディスカッションの中で，**学校行事や地域行事に取り組むことが心のケアになる**ことが分かった。２学期以降、このことを大切に教育活動に取り組んでいきたい。

・被災後から**積極的な心のケアを受けてこなかった子どもたちが，思春期以降に身体的な症状や行動面での問題として表出してくる**こと等について，職員で研修をしていきたい。

・現任校での取組が本当に理にかなった的を得たものであることが確信できてよかったと思っています。**管理職として教職員をまとめながら，子どもたちの健全な育成を目指して，今後とも生かしていきたい**と思いました。

・間借り先から元の校舎に戻っての運動会の感動は忘れられません。正に「奥深い感動」であり，「祝祭的な高揚感」に包まれたものでした。田端先生のお話を伺い，我が意を得た思いがしました。**地域に学校が戻り，子供の声が響き，時に校外に歩き，やりとりがあることが価値あることである**と肌で感じています。**学校の揺るぎない元気な学びの場としての有り様を管理職として支えていきたい**と考えます。

・本校（内陸部）で昨年度から，**親の問題による子供の問題も増えてきている**。児相通告３件。親の実家が被災していることが共通していた。**内陸部でおきる特有の問題**だと感じていたことを共有できた。これらはすべてＳＣとの連携によって発見できた。

・現場の直面している課題と本日のテーマは合致していたでしょうか。学校がなすべきことの話題が少なかったように思います。校長が集まるフォーラムの内容として，そのために**校長は何をすべきかが大切な話題**だったのではないかと思います。

○中学校

・**子どもたちを元気にするためには先生方が元気でいるように職場環境を整えていかなければならない**と感じた。幼稚園，小学校へのスクールカウンセラーの配置は急務である思う。

・**「外とのつながり」「地域との連携」「校内連携」**はまさに今実践中のことであり，背中を押された思いです。

・子どものケアのためには，**中高の連携がもっともっと強化されるべき**である。ここ2年はすべての学校に申し送りをしているが，**その結果や対応の在り方についての連絡会がほしい**。学校数が多くて難しいが，特に心配な子どもたちだけでも。

・**「子どもの健康調査票（カルテ）の作成と申し送り」**は大変参考になった。**支援が「点ではなく線でなければならない」**ことを再認識できた。

・**「子どもが回復していくために必要なのは，所属感，つながり，有能感，未知の目標**であり･･･」という部分は特に伝えたいと思いました。

・（わが校では）身近な問題を軽視した問題もかなり多く見当たり，現場に戻り，早急な対応が必要なところもありました。**職員の内面的な管理に今一度対応していきたい**。また，**生徒への内面的な部分にも職員が共通理解していくことが重要である**と思いました。

・**カウンセリングの主役は，最前線の先生方**と思います。自分も含め，子どもたちの様子を毎日観察し，変化にいち早く対応できるようにしたいものです。**子どもたちが信頼できる安心できる教職員となれるよう毎日の小さな実践を大切に，地道に頑張っていきたい**と思います。

・震災当時は避難所の手伝いをして頑張っていた生徒が落ち着いてくるとうつや退行などＰＴＳＤの内在化が見られ，心のケアが必要になったと言う事例がとても納得できた。管理職として，**心のストレスを把握すること，親の意識アンケートをとることを継続し，子どものケアを進めていきたい**と思った。

・**被災体験には個人差があり，見えにくく，我々も触れにくくなる。ゆるやかな想像力を持って子どもたちと関わり，校長として外との連携を密にしていきたい**と思います。

・問題行動と震災の影響との関連を考えてこなかったので，まずは**震災時の個々の生徒の状況や家族の状況について情報収集していく必要がある**と感じた。

・現在，本校の教職員は一人ひとりの生徒に対して，丁寧にきめ細かく指導援助を行っている。心の復興のために，**小中義務教育の９年を，連携を基に一貫した教育活動を展開していかなければならない**。特に**沿岸部の教育においては「心の教育」の研究も重要**になると考える。

・教員のレジリエンスを高めるためにも，頑張った教職員を認めてもらえる場があるとよい，と５年目になって思う。震災以外でも**職員一人ひとりの努力を認め，ほめることを心がけたい**。

・校長は生徒を守らなければならない。しかし，教職員も守らなければならないとあらためて強く感じた。**子どもを守るためには，教職員が元気であること。そのための方策をしっかりとっていきたい**。

・沿岸部の被災校と内陸部の学校との差を強く感じた。復興がまだまだであるという認識が不足していることも痛感した。**被災校との交流などで何かできることがないか考えさせられた**。

・それぞれの立場で提言された内容は学ぶところが多く，理解できるところも多い。取り組んでいく，実践していくことがいいということは言うまでもない。しかし，**教員の多忙化，超過勤務時間の増大が問題視される一方で，通知という名の調査や報告書の提出も増加しており，どのように時間のやりくりをしていくかは総合的に判断する必要がある**と感じる。

・震災後５年目になってこのようなフォーラムを開けるようになったことを落ち着きと捉えつつ，その反面，被災体験をした者にとってはまだまだ複雑な思いが残る。**今後，震災後の教育界のことを考える一石となるフォーラムだった**と思う。**これからも形を変えながらこういう機会は必要かもしれない。**

・**教師の子どもを支える姿が，子どもの安心感を呼び，問題を減らす**ということ。

・指導しっぱなし，任せっぱなしはあってはならないことであり，**必ず記録を残すことが次の指導へとつながる**ということ。

・諸団体は，学校との連携が進めやすいと考えているのではないか。教員は，自分の体調や状況を余り意識せずに受け入れる傾向があるからではないかと考えている。**管理職としては，教員の体調や状況を注視して，連携の可否を判断しなければならない**と感じた。

・「十分なケア」とはいかなる行為なのか？**教員に負担の増大を強いる一部の保護者への対応について，課題としての捉えが薄い現実がある。**スクリーニングの実施率はどれくらいなのだろうか。

・**「心のケア」がむしろ子どもたちの傷を大きくしている。体験を風化させることで前に進めるのであって，体験を語り継ぐことは前向きの心を止めてしまっている。**被災校と見られることに，子どもたちも教職員も抵抗を感じている。**自分たちは前向きに志を持って明るく頑張っている。**なのに，**支援だの心のケアだのと言われ，あのときに引き戻されそうになる。**

・ＳＣの配置に対する高橋先生の回答で，現場からの要望とＳＣの実情との大きな差異について具体的に理解することができた。**現場としては十分に活用を図りたいが，臨床心理士の資格の有無にかかわらず，ＳＣの人柄が大事である。**少々不適格と思えるようなＳＣも存在します。

○高等学校

・子どもたちの**小中高の連携がなお一層大切である**と再確認した。高校の場合はまだ，教育相談の大切さが浸透してきたばかりと思う点もあるが，**中学校との新入生の情報を共有化**していきたい。

・校内の連携，校外の様々な機関とのつながりの重要性を再認識した。**防災主任の配置，防災計画の見直し，訓練，カウンセリング，研修会などに取り組んでいるが，実態と内容について形だけで終わらせないようにしたい。**

・震災４年５ヶ月を経て，新しい状況が生まれてきていることに気付かされました。**教職員の余裕がなくなってきたのか，多忙という名で生徒への言葉がけや指導が荒くなってきた**部分も出てきた。**教員のセルフケアをもう一度共有し，未来の子どもたちの成長に関わらなくてはならない。**

・**偏らない視点を持つことの大切さ**を自覚したいと思っております。今回の論議で欠けているのは温度差だと思います。体験しなかった人達の心の負担もあります。**語るべきものをもっている人と，ただ一方的に聞かされるだけの人，この二者が共通の地平に立っていくことができるのだろうか，これからどんどんこの温度差は広がっていくのではないか**と思っています。

・毎日充実して学校生活を送れる環境整備，月命日の今日，あの日を忘れることなく機会を捉えては何らかの話をしていく必要があると思った。**問題行動と震災の関連性，健康調査票の効率的な活用，保護者アンケートの実施についても考えていきたい。**

・子どもたちを守るには，教職員を守ること，そのためには当然ながら風通しの良い職場環境づくりが必要である。「ユーモアとは『にもかかわらず笑う』」ということだと昔教えていただいた。このことを再確認することができた。

・内陸部の学校も避難所として活用された事例を聞いて，現任校について考えた。避難所として日頃から物品の準備，教員の意識改革，地域住民への連絡と協働等，確認したり実施したりすることが多くある。また，震災の影響を受けた生徒，教員のメンタルヘルスを重視していくことも心がけていきたい。

・子どもたちの未来のために，心の復興を目指すには生徒達に目をかける，手をかけることが大事であり，保護者や地域の方々と連携・協働して教育していく体制を再確認し，進めていかなければならない。校長とよく相談し，職員と連絡・報告を密に図りながら立体的に生徒達を守り，導く教育活動を展開していく。

・先生方へのメンタルヘルス，学校行事や地域行事への積極的対応，子どもの心のケアを大変なことと捉えず，これまでの対応をていねいに対応すること，所属感やつながりの大切さをもって子どもたちを応援して欲しいことなど，多くのことをお話ししていただきました。大変参考になりました。管理職としての心構えや地域との連携についてもお話をいただき，今後はより一層意識して取り組んでいきたいと思いました。

・レジリエンスを高める取組，一見簡単なことだが，非常に重要な観点だと思う。学校の諸活動において「レジリエンス」を意識していきたい。

・校内的には職員の協働体制，チーム力アップを心がけ，対外的には専門機関との日頃からの連携や情報交換の機会をもつことが大切であると改めて確認できました。校内では気軽に話ができる，相談できる雰囲気づくりに努めます。

・髙橋総子先生の「カウンセリングの主役は先生方」という言葉が印象に残りました。確かに毎日一番子どもたちの生活する姿を見ているのは先生方です。その先生方が活躍できるように校内連携等の環境を整えることが管理職としては大切なことだと改めて思いました。また関連して，頑張っている先生方の（頑張りすぎないようにということも含めて）心のケアも見過ごすことなく管理職としては気をつけなくてはいけないことだと思いました。生方が元気でないと子どもたちに明るく楽しい学校生活を送らせることができなくなると思います。

・地域連携の充実や学校行事等の一つ一つを大切にして，取り組みにあたっては工夫と最大の力を注ぐことを理解させていく。このことが，心のケアやストレス解消になることを伝えたい。行事等を実施すること以上に計画や事後処理において満足感の味わえる指導でありたい。

・かつて「開かれた学校づくり」という言葉がよく語られましたが，意味合いは違いますが，今こそ地域との連携，学校内での教職員間での認識共有が必要であると考えさせられました。

・子どもの話を聞いてあげるには「ゆっくりと時間をかけて」の必要がある。その時間をつくることが難しい。話の中に「その立場にならなければわからない」「大切なのはわかろうとする心」とあったが，これがすべてではなかろうか。あの震災当時，以前から不登校であった子どものあの大混乱の中で学校に登校してきていた。時間が経ち，落ち着いてくると再び来なくなった。

・被災，復興といっても様々な視点からの分析や関わりがある。今日のパネルディスカッションでは様々な立場のパネラーから様々な視点の御意見をいただき，とても興味深かった。コーディネーターの加藤先生にも様々な視点を上手にまとめながら，進めてくださり有意義なディスカッションになったと思う。

・大震災後の経済格差（教育格差），加速度的に進む人口流出，被災地における就職受入状況の激変など，高校生が抱える問題は数え切れないほどあるが，今回のフォーラムでは高校生を取り巻く問題があまり取り上げられなかったのは残念でした。
・様々な観点からの意見を聞くことができてよかった。特に宮城教育大学の田端先生の「文化的ケア」という視点はとても興味深く，是非深く掘り下げたい内容であった。震災関係者のみならず他の恵まれない環境にある生徒にも有効ではないかと考えた。是非本校でも

取り入れることが可能かどうか検討してみたい。

・先生方の目が子どもたちに注がれていれば，ＰＴＳＤなどの問題が出にくい。家庭に帰れば，また問題と向き合うことになる。学校生活が目標であるような学びの場であるべき。肉親を失った記憶は消えない。カウンセリングはまだ必要である。被災しなかった者が震災を忘れると被災者はさらに心に傷を負う。

・それぞれの立場で役立つ話をいただいた。特にその背景に震災の影響があるのではないかと考えることは印象に残った。また，田端先生が文化的な活動が心を癒やすと話をされていたが，生徒にとってやはり必要なことであると思う。学校を早く再開させるよう努力したことも同じ意味で役立っていたと思う。

○特別支援学校

・仮設住宅で生活する親子が在籍している。また，被災した職員もいる。本日それぞれの立場からの話は大変参考になった。時間の経過は必ずしも心の問題の解決や軽減にはならず，むしろ様々な問題を生んでいる状況をしっかりと見極め管理職として対応していきたい。

・言語化をはじめとして将来の目標を含め自己を客観化できることの大切さを感じました。そのための環境整備が校長として心がけるべき内容であると同時に，教職員のメンタルの強靭さ，健康さが大切であることを確認できました。また，行事をはじめとして日々の学校活動が大切なケア機能を有しているということも意識して運営を行いたい。

・震災に対する「温度差」「風化」という無関心や忘却に陥らないように防災という将来への備えをきっかけにして被害と教訓をしっかりと心に刻む取組を充実させたいと思います。

・震災の経験を風化させずに伝えていくことが大切である。支援学校においては児童生徒の実態から震災体験のトラウマ等があるかどうかハッキリとした状況がつかめないことも多い。子どもたちの心のケアについて学校全体で取り組む大切さを改めて感じた。

・震災で傷ついた子どもたちへの対応は，学校のみでは対応しきれない。それぞれの専門的な立場（関係機関）との連携が大切であることを実感した。外とつながることについて学校のリーダーとして積極的に指導・指示する必要がある。

・震災の心のケアを必要とする子ども，保護者だけでなく，問題行動や学力不振など支援を必要とする子ども一人一人をていねいに見取っていくこと，他の人材や機関を活用することなどを生かしていきたい。

・多職種の連携が大切になっていると実感したので，そのことを整理して職員に伝えたいと考えました。宮教大の田端先生の「文化はケア」の考え方に感銘を受けました。学校が果たす役割について改めて発見させられた思いです。

・特別支援学校では児童生徒理解について，ていねいにできる環境が整っているが普通学校においては「子どもの健康調査票」などの資料は不可欠になると感じている。小中高の申し送りの大切さはますますである。学校全体での取組は全県下で必要となると思う。

・縦と横の連携が大切，それがセルフケアのためにもなるということを伝えていきたい。さらに外の世界にもつながっていくことが大切と感じました。緩やかな想像力を駆使していきたい。

・震災当時，私は気仙沼の高校に教頭として勤務していましたが，今一番思い出すのは当時の校長のリーダーシップでした。生徒にとって何が一番大切であるか，それは一日も早く教育活動を再開することであるとの判断のもと，地域住民（避難されてきた人々）に対応していたのを思い出します。

・温度差解消と風化抵抗，幼・小・中・高・特別支援の連携，校内の組織的体制，特に地域の教育力の活用の重要性について再認識いたしました。心のケアの基本は，目配り・気配り・心配りだと思います。

・子どもたちに日々接する先生方が元気であり，子どもたちに良い指導ができるためにセルフケアの重要さを改めて認識した。その視点で職員の健康（心身ともに）を見守っていきたい。教員は子どもたちが経験した震災を適切に消化させ，子どもたちの経験を良い意味で未来に引き継いでいける人物に育てていかなくてはならない責務を感じている。

○その他

・自分の心が安定することが大事だと思うので，管理職のセルフケアが必要だと感じた。

・子どもの内面に目を向け寄り添って…といわれるが「言うは易い」されど実際にはどう対応したらいいかが難しい。

・文化的な活動が，間接的でもケアの一端を担っていることが分かった。

3　フォーラム全般についての感想・意見等

○小学校

・人としての強み，弱みを含めてレジリエンスを日々形成し続けるモデルとして教職員が子供の前に横にい続けること，その方向性に気づくことができた。

・それぞれの立場で子供たちを支えていただいている人々（機関）がいることを再確認した。学校の役割の大きさ，その中の管理職の意識の重要性が痛感させられた。どんな地域の学校へ赴任しようとも子供に寄り添う学校を目指していきたい。

・現任校では，被害の程度も小さかったため，震災から４年以上が経過した現在，教職員も保護者（ＰＴＡ）も含め，防災への関心がうすくなっており，沿岸部との温度差を強く感じています。大震災の風化が言われていますが，校長自らがこころの復興への意識を強く持つことが大事であることを改めて実感しました。今日の講演内容，パネルディスカッションの内容を，夏休み明け後の職員会議でぜひ教職員に伝えていきたいと思います。

・子供とともに教職員のレジリエンスの向上をどう図るかが校長としての大きな課題の一つであるとの認識を新たにした。震災体験の語り継ぎについて，マンネリ化意識が教師間でも生まれてきており，災害直後の被災程度差による温度差がその原因になっているように思えてならない。語りたくても語れない教員がストレスを抱えている学校があるのではないか。

・被災体験の表出は時差，個人差があり，ふれにくい，そっとしておきたい感もある。その立場にたつことは難しいが，わかろうとする気持ち，ゆるやかな想像力を持ちたいものだと思いました。

・一人一人の子供の心に寄り添って，笑顔と歓声のある学校経営を心掛けたいと思います。

・「震災に起因する子供達の問題」は確かに存在するが，我々は今，その子の現実を先入観なしに向き合うことが大切だと思う。そこに震災という要因があるなら，それに取り組む。それが大切だと思う。どこの学校においても社会のひずみによる子供達の問題は，加速度的に増えているのだから。

・こころの復興は，これからが正念場になることを改めて確認することができました。

・企画がよかった。震災後のこの時期に公立・私立・仙台市も含め，すべてで考えることができたのがよかった。

・記録の蓄積と継承が，幼・保・小・中，そして高へなされていくことが大切であると感じた。学校として努力することは，これからもたくさんあるが，笑顔のある職場で今後もありたいと思います。

・全てを学校でなんとかしようというのは限界です。スクールカウンセラーの配置を含め，どう支援・ケアをするか仕組み作りが早急に必要だと感じました。

・心のケアも復興支援も大切であると思いますが，もう**次の段階の具体的な各学校の取組や実践内容を提案する段階である**と思います。

・震災から５年目，このようなフォーラムは**震災を風化させないためにも継続していってほしい**と思います。

○中学校

・**震災の記憶が日々風化していく中で，悩み続けている者がいる。本当に心のケアが必要なのはこれからかもしれない**と思う。

・教員の心のケアについて言及するのであれば，その**セルフケアについてもっと勉強する場があったらよい**と感じた。

・**県内をいくつかに分けて開催してもよい**と感じた。

○高等学校

・あの当時を思い出すと予測という意識が低く，皆あのようなことが起こらないと思っていたし，現在の校長先生たちもあのようなことが，もう起きないと思っている人も多い。今日の話でも，**災害には対抗できないとあったが，あらゆることを最大限に予測することが大切である**ことを実感した。

・震災について様々なことが風化していることは残念ながら事実である。しかし，**学校現場では家庭を含め，まだまだ子どもたちの心のケアが重要であることを再認識した**。本日のフォーラムの意見等を参考にして，今後学校経営に生かしていきたいと思う。

・仮設生活者もまだまだたくさんいます。**教育の力で負の連鎖の生活貧困者とならないよう我々教育者が取り組んでいくべき示唆を受けた**フォーラムであった。

・４年５ヶ月を経て本日，このようなフォーラムを開かれたことは，意義あることと思う。**震災直後には想定していなかったことが年月を経て現れることが少なくない**からである。いつも教職員の心のケアの必要性は強調されているが，その方策は見つからないという感は残る。

・大震災の教育復興に関しては日本だけでなく世界中がその行方を注意深く見守っていることと考えます。**外国の専門家を招いて，これまでの取り組みと今後の展望について，多角的な視点からの意見，感想を伺いたい**と考えております。また，県立学校からもパネリストを出していただければと思います。

・今日は傍聴という形で参加させていただき，大変ありがたい時間でした。基調講演，パネルディスカッションともにとても貴重なものでした。そして，**これから何を大切にしていかなくてはいけないか，気をつけなくてはいけないか，心に響くものでした**。明日からの道しるべをいただきました。ありがとうございます。

・大変考えさせられた研修会でした。**震災の影響が内陸部でも顕在化している**という報告もあり，**今後あらゆるスタイルで出てくるのだろう**とある意味不安にもなりました。今後制度的な裏付けがなければ，**ＳＣ・ＳＳＷの配置**できないので，是非行政面からの確固とした方針を打ち出して欲しいと思います。

○特別支援学校

・管理職にしぼってのフォーラムはとてもよかったと思います。もう一度**原点に戻る機会**をいただけました。

・講演，パネルディスカッションのどちらも内容がとてもよかった。パネリストの先生方に感謝申し上げます。また，**震災をテーマにして年に一度，このような企画がずっと必要**だと思います。

・被**災地宮城の子どもたちに今何が必要で，どんな取組が必要なのか改めて考えることができた**。学校をあげて行うこと，個々の生徒に関わってくること，ていねいに取り組んでいこうと思う。

・残念ながら震災が風化しつつある地域もあるが，**どの地域・校種であっても震災に積極的に向き合う児童生徒の育成に，家庭・地域と連携し，学校経営に邁進する**決意です。

・今の言葉で言えば，**「チーム学校」としてのシステム的見方から対応する**ことの大切さを感じました。**支援学校でも外部専門家の力をお借りすることの大切さを感じています。**言語化の難しい子どもへのアプローチも考えつつ，今後の学校運営に生かしたいと思うフォーラムでした。**「笑顔」の溢れる学校にしたい**と思います。

○その他

・**１１日という特別な日にフォーラムを開くことはとても大切で有意義である**と思う。

・講演やパネルディスカッションの報告にある課題について，**数字的な資料があると良かった。**

・**記録，冊子として発表されることを期待**している。

4　その他（要望・意見等）

・**県内のＳＣの配置を一層増加させてほしい。**小学校こそ必要。親のケアを早期にできる。子供の幼い時代にこそ親を支える必要がある。

・新入学期の**震災体験についての聞き取り調査**について，**全県的に統一した質問紙があるとよい**と思った。デリケートは内容なので，専門家による項目，聞き方が生きたもので，さらに記録の蓄積面で有意義な資料となるものが早急に示されればありがたい。津波被災校ではデータがあると思うが，内陸部の学校はそこまでしていない。

・現場の実態や声をもう少し取り上げる工夫があってもよかったのではないか。

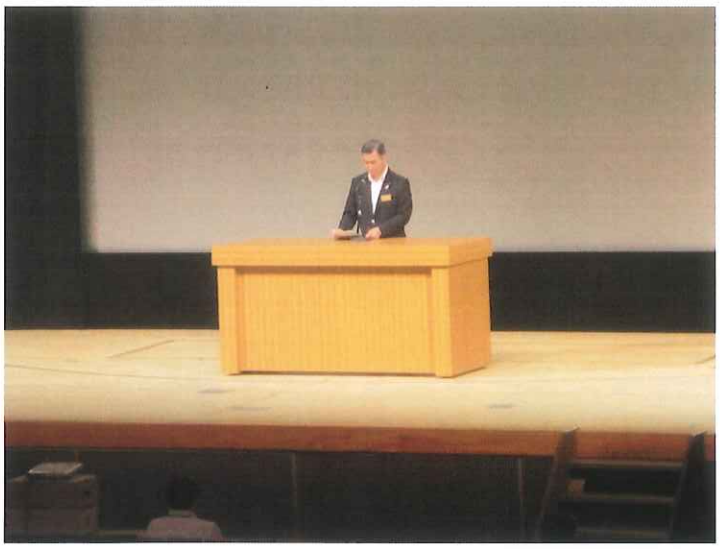
・**スクールカウンセラーの重要性**について小学校に臨床心理士の資格をもった方の配置について，ぜひ考えていただきたいと思いました。

・小学校へのＳＣ**派遣回数の増加，考慮して欲しい。**

・せっかく県と市と共催なのであれば，指定席でなくフリーにして，もう少し**他管区の管理職との情報交換ができたら**と思いました。

・本日は地教委からは「当番を置かない日」に指定された。文字どおり学校には誰もいない状況にある。こういう日こそ，**管理職としては学校に緊急の事態に備えて，学校にいつでもかけつけられるようにしたい**ものである。その意味でフォーラムの実施日については，「当番を置かない日」の前後の方がよい。

フォーラム当日の様子



教育長挨拶

会場（講演中）

会場（パネルディスカッション中）

東日本大震災心の復興事業担当者

所　　属	職　　名	氏　名	備　　考
総務課総務班	課長補佐（班長）	須藤　敏一	事務局
教職員課研修免許班	課長補佐（班長）	佐藤　和寛	「宮城県教育庁子どもの心のケア支援チーム」所属
義務教育課指導班	課長補佐（指導主事）	八巻　正弘	「宮城県教育庁子どもの心のケア支援チーム」所属
特別支援教育室 企画管理班	主幹（指導主事）	伊澤　和人	「宮城県教育庁子どもの心のケア支援チーム」所属
高校教育課 学校経営・生徒指導班	主幹（指導主事）	松平　聡	「宮城県教育庁子どもの心のケア支援チーム」所属
スポーツ健康課 学校保健給食班	主幹（指導主事）	金野　智津	「宮城県教育庁子どもの心のケア支援チーム」所属
特別支援教育室 女川高等学園準備担当	室長補佐（指導主事）	菅井　理恵	事務局
子ども総合センター	主任主査	松村　環	事務局
福利課	庁副参事兼課長補佐 （総括担当）	千葉　均	事務局
福利課福利健康班	課長補佐（班長）	畠山　浩美	事務局
福利課福利健康班	技術主幹	奥山　清美	事務局
福利課企画管理班	課長補佐（班長）	山田真由美	事務局

【主管：福利課】